

つながる「防災まちあるき」 ー活動の記録ー

The booklet for the activities of
engaging “Disaster Prevention
Town Walking”

2017年12月～2019年7月
From December 2017 to July 2019



別府シールド
APU×別府市役所×ビービズリンクBIP

目次

1. はじめに	1
2. 活動の背景	2
3. 活動の目的	3
4. 活動の記録	
第1回防災まちあるき「避難する」(2017月12月10日)	4
第2回防災まちあるき「津波」(2018月5月13日)	6
第3回防災まちあるき「避難所を知る」(2018月11月11日)	8
「やさしい日本語」講習会(2019月2月9日)	10
第4回防災まちあるき「体験する」(2019月5月12日)	12
防災カードゲーム「クロスロード」(2019月7月6日)	14
5. しおりについて	16
6. 準備について	22
7. 参加者・スタッフのコメント	24
8. おわりに	26
9. 参考文献・謝辞・執筆者	27



1. はじめに

大分県別府市にある立命館アジア太平洋大学（APU）では、世界約90の国と地域から来た3,000人ほどの留学生が学んでいます。その別府は2016年4月、震度6弱の地震に見舞われました。APUの留学生の中には、4月に入学したばかりの留学生もあり、ほぼ日本語がわからない状態で大変不安な数日を過ごしました。

この地震をきっかけとして、一般社団法人ビービズリンクBIPと別府市役所文化国際課の協力を得て、日本語教員の有志5名が、2017年12月、「防災まちあるき」を始めました。この活動の目的は留学生が防災に関する知識を学ぶ機会を作るとともに、積極的に学生がまちに出て、まちを知り、人とつながるきっかけを作ることです。さらに、地域に住む日本人にとっても、異なる文化背景を持つ留学生との交流を通じ、新しい価値観に触れる場になればと考えました。災害時に、誰かが誰かを守るのではなく、自分にできること、他の人ができることに気がつき、お互いを知るために、みんなで一緒に考えていく必要があるのではないのでしょうか。

この冊子にはこれまで行ってきた4回の防災まちあるきと2回のワークショップの内容、スタッフの工夫、参加者のコメント、課題などを載せています。2017年12月から始めて、まだまだ課題もあります。しかし、この冊子が少しでもほかの地域での防災活動の試みに役に立つものであれば、幸いです。



2. 活動の背景

地震時に留学生が直面した問題

2016年の地震後に留学生・日本人の行動を調査しました。留学生のアンケートの回答には、「どの情報が正しいのか判断に困った」「英語の情報がなく困った」といった情報に関するコメントが多く見られました。さらに、留学生へのインタビュー調査では、母国で地震の際には避難所ではなく屋外に避難するように学んだと答えた学生もいました。このように、留学生は災害時に発せられる緊急情報が理解できず、また、日本人とは防災に対する認識が違うこともわかりました。

大学の地理的な問題

APUに入学した留学生は最初の1年間、大学の敷地内にある寮に住まなければなりません。しかし、APUは山の上に位置し、まちの中心部に出るのにバスで40分かかるため、学生は頻繁にまちに出る機会がありません。そのため、留学生はまちや地域の人とつながりにくいという問題があります。

別府市の外国人支援の問題

別府市の人口は、116,974人(2019年11月)でそのうち外国人人口が3.7%(4,371人)を占めています。このように国際色豊かなまちであるにもかかわらず、別府市には国際交流センターのような常に外国人をサポートする施設がなく、災害時など困ったときに頼る場所がありません。

以上のような背景を踏まえ、「防災まちあるき」を始めました。現在は、APUの教員だけでなく、APUの留学生もスタッフとして参加し、別府市役所文化国際課、防災危機管理課、ビーブズリンクBIPとともに、「別府シールド」という名前で活動を続けています。「シールド」というのは英語の‘shield’のことで、「盾」を意味し、「みんなで別府を守ろう」という意味が込められています。また、そのシンボルマークは、別府の温泉と生命・おもいやり、そして人の笑顔を表しています。



3. 活動の目的

防災の知識を身につける

判断、行動につなげるための知識を得る⇒話し合いの中でストック情報*を増やす

まちを知る

行動できるように自分たちの町を知る⇒防災の意識を持ち自分事として捉える

人とつながる

平時からお互いを知る⇒災害時に声をかけあえる、相互理解へのつながり



どうして「まちあるき」？

座学で知識だけを得るのでは、実践につながりにくのではないかと考え、①まちを知ることができる、②実際に自分の目で確かめた経験から知識として残すことができる、③オリエンテーリングのような楽しさがある、「まちあるき」を選びました。

また、全体を通して、「実践、ふりかえり、共有、次につなげる」というコンセプトを念頭に活動を計画していきました。毎回、実際に歩いたり、体験したり、話を聞いたりして知識を得る「まちあるき」パートと、それをグループで意見を交換しふりかえりができる「ワークショップ」の2つのパートに分けました。経験することでより記憶に残ること、自分自身の気づきやグループメンバーの気づきを共有することでさらなる気づきが生まれることを期待しました。そして、対話するなかでお互いの意見の理由や根拠をしっかりと聞くように促しました。さらに、家に帰ってから自分の家の近くの避難所を確認したり、話し合ったことなどをもう一度考えてみたりといった次の行動につながるように心がけました。

各回の防災まちあるきページは、左の水色の枠に全体の活動の流れを載せ、より詳しい説明は吹き出しに書いています。その下にはスタッフのその活動を行った意図や工夫、課題などが書いてあります。そして考えてみようのコーナーもありますので、よかったら読みながら一緒に考えてみてください。

活動全体のまとめ（詳細は各回に書いてあります）

	実施日	参加者	テーマ	内容
第1回 防災まちあるき	2017年12月	55名	『避難する』	・避難所や標識の確認 ・防災の話とクイズ
第2回 防災まちあるき	2018年5月	89名	『津波』	・津波避難ビルの確認 ・津波の話とクイズ
第3回 防災まちあるき	2018年11月	78名	『避難所を知る』	・10分でどこまで歩けるか ・避難所での役割を知る
ワークショップ	2019年2月	40名	『やさしい日本語』 講習会	・「やさしい日本語」の基本 ・「やさしい日本語」の実践練習
第4回 防災まちあるき	2019年5月	72名	『体験する』	・避難所や公園の確認 ・地震体験、クラフト体験 ・防災クイズ
ワークショップ	2019年7月	51名	防災カードゲーム 『クロスロード』	・「クロスロード」体験 ・「クロスロード」問題作成

*Note:人が行動を起こすときには、あらかじめ提供された情報やこれまでの教育・訓練などで蓄積された情報（＝ストック情報）がスタートラインとなる（田村、2017、p.3）



4. 活動の記録



第1回 避難する

日時:2017年12月10日(日)10時から12時まで
場所:別府駅から別府市役所へ移動
参加者:56名(日本人22名、外国人24名、スタッフ10名)
スタッフ内訳(APU5名、市役所3名、ビービズリンクBIP2名)

活動の目標

- ・実際にまちを歩き、いざという時のために避難場所や避難方法を知る
- ・今後の防災訓練などへの参加の意識を高め、意識の輪を広げる

活動の内容

- ①まちあるき … 避難場所地図の写真を撮り、カードに書かれた避難所を探し、市役所へ
- ②ワークショップ … まちあるきをして、気づいたことについて話し合う、防災クイズと解説

活動の流れ

9:00 スタッフ集合
9:30 受付開始

①まちあるき

9:45 グループごとにまちあるきの説明をしてスタート

タスク1

避難所マップの写真を撮る
行先カードを受け取る



避難場所地図

行先カード

タスク2

指定された避難所の前で全員で写真を撮る
(2つの避難所に行く)

タスク3

別府公園の貯水槽の前でおもしろいポーズで写真を撮る

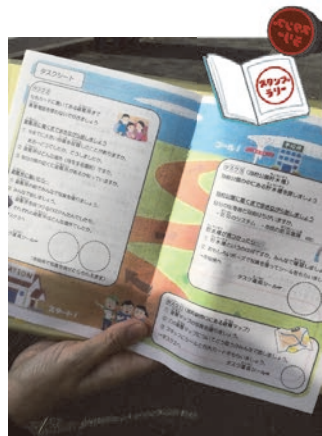


グループ分け

外国人と日本人がそれぞれ2,3名になるようにグループ分けをした。お互いに名前や好きなものを聞きながら、話しやすい雰囲気を作った。

まちあるき

行先カードに書かれた避難所にグループで向かい、証拠写真を撮った。それぞれのタスクをこなすごとにシールがもらえた。携帯電話は使用せず、グループメンバーに聞いたり、道行く人に聞きながら市役所を目指した。



活動のしおり(タスクシート)

ゲーム感覚で達成感を味わいながらタスクをこなせるようにスタンプラリーの要素を取り入れた。また、グループメンバーそれぞれの地震の体験などを話しながら歩けるように問いをあらかじめ設定していた。

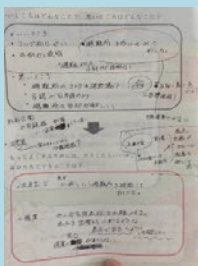
グループメンバーは、ほぼ全員初めて会う者同士で最初は緊張も見られた。しかし、一緒に歩いてタスクをこなす中で、市役所に到着した時にはかなり打ち解けていて、スムーズにグループ活動に移ることができていたように見えた。避難所を見つける際、携帯電話の使用を禁止したのは、安全面と、もしもの際にわからなければ誰かに尋ねるという意図を含んでいた。また、実際に歩くことで普段気にかけて見ていない標識や道路の構造、また避難所は小学校や温泉がある公民館など異なる形態の避難所を選んだ。歩道が細く、車道にも気をつけつつ歩いていく必要があり、設定された問いについて話すことが少し難しかったという感想をもらった。

②ワークショップ

10:50

市役所に到着

グループごとに座り、しおりに「気づき」を書く



11:00

気づきをグループで共有
全体共有

自分たちにできること
個人→話し合い
全体共有



11:40

クイズTime

市役所からの解説

12:00

まとめとお知らせ

気づき

いいところ・悪いところはどんなところ？

- ・たくさん避難所があるので安心
- ・避難所のマークがわかりづらく、避難所だとは思わなかった
- ・標識などがないので、避難所までどうやって行ったらいいかわからなかった
- ・避難所に温泉があると清潔に保たれるのでよい
- ・公園内の地図が汚くて、貯水槽がわからなかった
- ・英語などの記載がないから外国人は困ると思う
- ・別府公園の自動販売機が災害対策用だった

もっとよくするためにはどうしたらいいか。自分たちにできることは？

- ・看板をもっとかわいく目立つようにする
- ・地図を考えるときいろいろな世代の人の意見を入れて作る
- ・まず引っ越したら避難所を確認しておく
- ・標識などを多言語表記にしてもらうように市にお願いをする
- ・地元の人と知り合っておく

全体で気づきを共有をすることによって様々な意見を聞くことができた。参加した日本人学生の中には大阪や神戸出身の学生もいた。そこでの取り組みでは、避難所のステッカーが様々な場所にあったり、給食が非常食になったり、留学生は必ず避難訓練に参加することになっていることなどを共有してくれた。別府市ではこれまで大きな災害がなかったため、対策もあまりされていない現状がある。それをこれから地域全体で考えていく必要があるだろう。

クイズTime

Kahoot!*を利用して地震に関わるクイズをグループで答え、1番になったグループには市役所からボールペンの賞品が贈られた。

スタッフのふりかえり

- ・実際の避難所に避難をすることで、臨場感が出せた。
- ・大きな公園の中にある貯水槽が見つけづらく、予定していたよりも時間がかかってしまった。
⇒スケジュールの段階で時間を多めに設定し、調整できる時間を作っておく。
- ・グループには英語がわかる参加者がいたが、やはり言語的なサポートがないと防災というテーマについてしっかり理解することが難しかった。
⇒説明のスライドや全体共有では、やさしい日本語や英語の通訳も取り入れる。
- ・防災に関する知識を専門的に持った人がいなかったため、説明が表面的になってしまった。
⇒専門的知識を持っている人にお願いをすることで知識面を強化する。
- ・到着順にグループ分けをしたため、国籍がアンバランスになるグループが最後になった。

考えてみよう!

世界で地震が最も多い国はどこ?(2017年調べ) (答えはp.7)

*Note: Kahoot!とは、学校教育でも用いられている様々なクイズ形式を用いたインターネットで作成できる教材。個人でもグループでも回答に参加することが可能で、参加者は能動的に活動に参加できる。 <https://kahoot.com/>

第2回 津波

日時:2018年5月13日(日)13時から15時30分まで
場所:APU PLAZA OITAから社会福祉会館*へ移動
参加者:89名(日本人36名、外国人42名、スタッフ11名)
スタッフ内訳(APU5名、市役所5名、ビービズリンクBIP1名)

活動の目標

- ・実際に町を歩き、津波が起きたときのために避難場所や避難方法を知る
- ・今後の防災訓練などの参加への意識を高め、意識の輪を広げる

活動の内容

- ①まちあるき … 別府市の防災マップを実際に活用して、グループごとに指定されたルート歩きながら、海拔表示・津波避難ビル・避難所を確認する
- ②ワークショップ … まちあるきをして、気づいたことについて話し合う

活動の流れ

11:30 スタッフ集合
12:30 受付開始
13:00 津波に関する説明

①まちあるき

13:25 まちあるきの説明
☆ルートが書き込まれた
防災マップ(冊子)を配布
13:30 まちあるきスタート

海拔表示タスク

- ・表示の写真を撮る
- ・海拔何mか確認する
- ・表示に記載されているその他の情報を確認する



津波避難ビルタスク

- ・何階建てか確認する
- ・津波避難ビルの表示の前でみんなで写真を撮る



避難所タスク

- ・避難所は見つけやすさ・避難所の特徴について話す
- ・避難所の前で面白いポーズで写真を撮る

津波に関する話

まちあるきの前に、津波及び津波発生時の避難に関する知識を増やすために、別府市役所防災危機管理課職員から、別府市の海拔や津波の到達時間、避難の際に危険な場所、自助・共助・公助等についての話を聞いた。



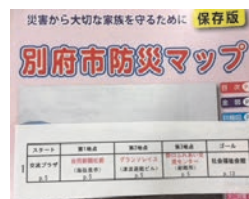
まちあるき

スタートのAPU PLAZA OITAからゴールの社会福祉会館までグループ別に指定された海拔表示・津波避難ビル・避難所といった津波発生時に備え、確認すべき標識や場所を探しながら歩いた。参加者が多かったため、混雑を防ぐために6つのルートを作成し、順次出発した。

まちあるきの前に、市役所職員が津波の話をしたので、その後のまちあるきでも、より自分事として考えながら歩くことができていたようである。ただ、ルートを6つ作ったことで、説明に時間がかかり、まちあるきの時間が短くなった。そのため、最後のポイントまでたどり着けないグループもあった。

タスクシート(p.18参照)

グループによりルートが異なるため、各ポイントでの写真撮影をタスクに入れ、ゴール地点で写真を確認し、タスク達成シールを配布した。前回と同様、各ポイントでのタスク以外にも自宅周辺の海拔や自宅の近くの高い建物、自身の出身地域の避難所について歩きながら話すタスクも設定した。



この日は雨が降っており、傘やマップを両手に持ち、タスクをこなしたり、グループで話したりすることが難しい状況であった。

社会福祉会館に到着
お茶とおかして休憩

②ワークショップ

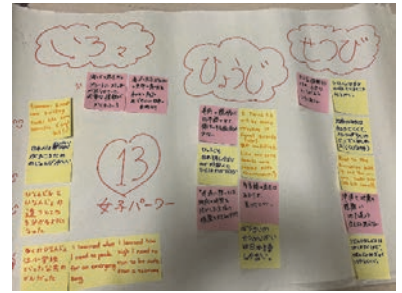
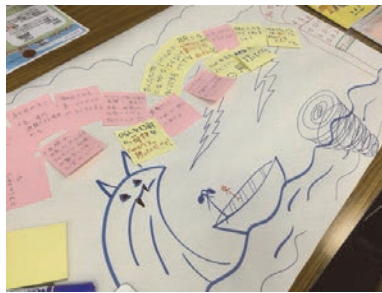
14:00

グループごとに座り、気づいたことをポスターにまとめる



となりのグループにどんな気づきがあったかをポスターを見せながらお互いに発表

15:00
お知らせ



一人一人まず思い思いに気づいたことを1つずつ付箋に書き出した。それからグループで、模造紙に気づきのカテゴリー分けをしたり、イラストを入れたりしてまとめた。日本人はピンクの付箋、外国人は黄色の付箋を使って書いた。相違点、共通点などを共有した。

まちあるきでの気づき

日本人	外国人
避難ビルが見つけにくかった	標識や避難所を見つけにくい
標示をもっと目立つように	標示は青じゃなくて赤がもっと見やすい
多言語標示にする	日本語だけではわからない
別府の住宅街は道が狭い	道が狭い
普段こんなに標識があることに気付かなかった	避難場所がたくさんある
普段歩いていないので、地図を見て場所を探すのが難しい	道がわからなかったときに別府の人が頼りになった
坂道や段差が多いので自力で避難が難しい人の配慮が必要だと思った	障がい者に不便。坂を上ることが難しい
普段から日本人と外国人の交流が必要	日本人と助け合いましょう

気づきは「道路や標識」、「言語などの表記方法」、「他者への配慮」といったものが多くみられた。また、上の表からもわかるように日本人と外国人の気づきに共通点が多くみられた。施設設備といったものの気づきと日本人や外国人とのつながりの必要性といった人への気づきもあった。4, 5人のグループが19チームがあったが、どのグループも積極的に話しながらグループワークを行っていた。気づきの書き方としては、日本人は現状を見て、どうすればいいかといった書き方が多かった。これは、外国人の参加者は留学生が多かったが、日本人は社会人がほとんどだったので、状況だけではなく解決方法を書くといった違いがみられたのかもしれない。

スタッフのふりかえり

- ・気づきを模造紙にまとめるのはかなり時間がかかる。時間がないと不完全燃焼で終わってしまう
⇒別のグループと発表しあう中でまた新たな気づきがあるため、時間的余裕が必要。

考えてみよう!

家の近くの避難所と津波避難ビルはどこにありますか。

*Note: 社会福祉会館は、災害時は一時避難所としても活用される。

p.5「考えてみよう!」の答え: インドネシア

第3回 避難所を 知る

日時:2018年11月11日(日)13時から15時30分まで
場所:APU PLAZA OITA
参加者:78名(日本人37名、外国人26名、スタッフ15名)
スタッフ内訳(APU7名、市役所5名、一般スタッフ2名
ビービズリンクBIP1名)

活動の目標

- ・避難所に関わるストック情報(p.3参照)を増やす
- ・各国の避難所事情を共有し、違いを知る
- ・被災した場合、避難所で自分に何ができるか考えてみる



活動の内容

- ①まちあるき … 10分でどこまで避難できるかを測り、10分で歩ける距離を体感する
- ②ワークショップ … 避難所で自分たちに何ができるかについて話し合う
災害時に起こりうる状況について話し合う

活動の流れ

11:30 スタッフ集合

12:30 受付開始
グループ分け
お互いに自己紹介

13:00 はじめの挨拶

13:05 グループで話し合い

13:10 避難所を知る

①まちあるき

13:20 まちあるきの説明

13:30
グループごとにタスクをする

帰って、お茶とおかして休憩

14:30
ふりかえり
グループごとに座り、しおりに
「気づき」を書く



第2回の反省を踏まえ、今回は冒頭で活動の目標を伝えた。また、使用するスライドにも必要に応じ英訳を付け、外国人の参加者にも、活動の指示や内容を容易に把握できるようにした。

避難所を知る

まず、各グループで日本や各国の避難所について知っていることを話し合った。そのあと、別府市役所防災危機管理課職員より、日本の避難所についての説明を聞いた。さらに、第2回で学んだ津波に関する知識(想定される津波の高さ、到達時間、避難に必要な標高など)も再確認した。

防災に関する日本語は専門的な言葉も多く、外国人の参加者にはわかりにくい。そのため、今回から日英どちらも堪能なAPUの留学生がスタッフとして参加し、市役所職員の日本語による説明などを逐次英訳した。

まちあるき

配布された地図(p.18参照)を頼りに、グループごとに以下のタスクを行い、帰ってきてから、ふりかえり(p.19参照)をした。

【行きのタスク】

津波が来ることを想定し、野口ふれあい交流センター*に向かい、10分でどこまで逃げられるかを体験した。

【帰りのタスク】

海拔表示を探しながら帰り、自分が歩いてきた道が安全かどうかチェックした。

参加者からは「10分では思ったより遠くまで行けない」、「自分は足が悪いので歩くのが大変だった」などの声があった。

*Note: 旧別府市立野口小学校跡地に設置された野口ふれあい交流センターは、災害時は収容避難所として活用される。
APU PLAZA OITAから10分程度で行ける距離に位置する。

②ワークショップ

14:20

避難所についての解説

14:30

避難所で何ができるか



全体共有

15:00

ケースの検討

全体共有



15:20 まとめとお知らせ

避難所についての解説

災害時における市役所の動きについて、別府市役所防災危機管理課職員の解説を聞いた。どのように避難所が設置され、市役所が運営にどう関わるのかについて聞き、避難所はそこにいる避難者が中心となり運営する必要があることを学んだ。

避難所で何ができるか

1. グループメンバー各自がしおりの「避難所における役割分担」リスト(p.20参照)を見て、自分にできることを考えた。
2. グループで一枚のA3の模造紙を使い、付箋に自分ができていることを書いて貼っていった。
3. 各メンバーが自分ができていることは何か、なぜそれができると思うかについて順番に発表していった。
4. さらに、各メンバーの個人的な体験やエピソードや、具体的に避難所でどんなことができると思うかについて話した。

避難所で自分にできることの例

日本人	外国人
パソコンが使える	料理ができる
やさしい日本語への書き換え	大型車が運転できる
日本語と英語の通訳	歌を歌ってみんなを楽しませる
公的機関とのやりとり	母語と英語と日本語の通訳
非常食のアレンジ料理	子どもの世話ができる

自身の気づき、他者への気づき ⇒ 役割分担
できることを考えることで災害時の行動につながる可能性

ケースの検討

「頭にスカーフをした、外国人の女性が、足のけがをしているようです。とても痛そうです。あなたはどうしますか。」というテーマでグループで話し合いをした。

限られた情報をもとに、「外国人の女性」の背景を推測しながら、どうすべきか話し合った。また、イスラム教徒の留学生がイスラムの決まりを説明し、それを全体で共有できる機会もあり、背景の異なる当事者の話を直接聞いて、お互いを理解することの大切さが実感できた。

参加者からのコメント

- ・避難所では受け身ではなく、できることをすればよいのだというイメージが持てた。
- ・イスラム教について、命に関わるような事態ではスカーフを取るなど特別な判断をしてよいことが示され、納得した。

スタッフのふりかえり

- ・話し合いは、1～4に細かくステップを分け、話し合いの時間を指定しながら行い、また、ファシリテーターを付けたことで、スムーズに進行できた。

考えてみよう!

津波から避難するためには海拔何メートル以上に避難すれば安全か。(答えはp.11)

「やさしい日本語」講習会

日時:2019年2月9日(土)9時30分から12時30分まで
場所:APU PLAZA OITA
参加者:40名(日本人32名、外国人1名、スタッフ7名)
スタッフ内訳(APU6名、ビービズリンクBIP1名)



◆「やさしい日本語」とは何か

「やさしい日本語」という言葉を聞いたことがあるだろうか。「やさしい日本語」は、平易な語彙や表現を使った外国人にもわかりやすい日本語である。例えば、災害時に「地震の影響で壁に亀裂が入った建物」といっても外国人にはわかりにくい、「地震(じしん)で 建物(たてもの)が 壊(こわ)れました。この建物は 危(あぶ)ないです。」といえは伝わりやすい。災害時に、「やさしい日本語」を使えば、情報に取り残される外国人が少なくなるだろう。

日本人が「やさしい日本語」を使うにはコツがある。1999年から広く「やさしい日本語」の開発普及活動を行っている弘前大学人文学部社会言語学研究室(佐藤和之氏)では、「やさしい日本語」12のルールをまとめている。

◆ワークショップ

これまでの3回のまちあるきを通して「やさしい日本語」の必要性を感じた。私たち別府シールドは、2019年2月9日(土)に「やさしい日本語」有志の会*から杉本篤子氏を迎え、「やさしい日本語」講習会を開催することにした。講習会の前半では、災害時に外国人が、災害に対する基礎知識がないこと、災害用語が難解なことなどの理由により、困難な状況に陥りやすいことを知った。そして、外国人にとってどんなことが難しいかを考えた。さらに、「やさしい日本語」12のルールと、どのようなときに「やさしい日本語」が使えるかを学んだ。後半では、グループで「やさしい日本語」の書き換えの課題に取り組み、最後に杉本講師により厳しいながらも楽しい講評が行われた。講評のあとは、全国の自治体の「やさしい日本語」の取り組みなどの紹介もあった。

スタッフ集合
講義スタート

「やさしい日本語」が
生まれた背景

災害時に外国人が
困ることについて

12のルールを
1つ1つ学ぶ

9:00 9:30

11:00

今回の講習会は、12のルールを学ぶだけではなく、日本語に不慣れな外国人にとって何が「やさしい(易しい・優しい)」かについて考えるきっかけになった。相手をおもいやり、行動できる人が増えれば、別府がより暮らしやすいまちになるのではないだろうか。

◆グループ活動

講習で学んだ12のルールを活用して、グループで相談しながら、課題文(「うがい」の仕方と「手洗い」の仕方)を「やさしい日本語」に書き換える活動をした。

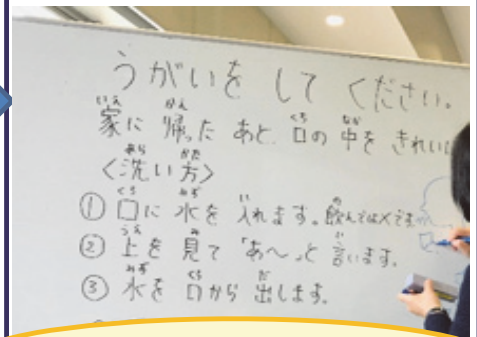
原文 (うがい)

外から帰った時やのどに不快感があるときなどは、お水やぬるま湯でうがいし、ウィルス洗い流しましょう。

<うがいの方法>

- ①口に水を含み、「クチュクチュ」して吐き出します。
- ②もう一度口に水を含み、上を向いて15秒程度「ガラガラ」して吐き出します。
- ③さらに「ガラガラ」を繰り返します。

実際に参加者が書き換えた例



「やさしい日本語」12のルールを活用した

- ・文は余白を空けて区切り、分かち書きにする
- ・1文を短くして文の構造を簡単にするなど

情報の取捨選択も大切!

グループ活動開始

「うがい」と「手洗い」の仕方の説明を書き換える

講評

「やさしい日本語」を活用した自治体の文書の紹介

終了

11:15

12:30

参加者からのコメント

- ・12のルール、ためになった! 日常の日本語が外国人にとって、とても難しいのだと分かった。
- ・自分ではやさしいと思っている文がまだまだ難しい文であることが分かった。
- ・書き換え練習により、具体的な書き方、伝える順について知ることができ、よく理解できた。
- ・日本人へのお知らせもやさしく、わかりやすい日本語を使い、理解しやすくなったほうがいい
- ・杉本講師のエネルギーに元気をもらった。

実施後、スタッフの反省

- ・開始時間が予定より遅れた。・前半にもっと休憩を入れたほうがいいかもしれない。
- ・より深く学ぶために、質疑応答、ふりかえりや整理する時間があつたほうがいい。
- ・次回は全体写真を撮って、記録に残したい。

次回へ向けて

- ・昼をはさんで2時間と2時間のイベントでもよい。
- ・救命救急訓練や避難所ゲームなどでも、「やさしい日本語」を活用したほうがいいのでは?

*Note:「やさしい日本語」有志の会は京都を本拠地として、大地震などの災害時に日本人と同様に少しでも多くの外国人も助かってほしいという思いから、「やさしい日本語」のワークショップや外国人の防災教育活動に取り組んでいる団体である。<http://nihon5bousai.web.fc2.com/>

p.9「考えてみよう!」の答え: 別府市では海拔10mを目安にしていますが、想定される津波の高さは地域によって異なります。かならず自治体が発行しているハザードマップで確認し、安全な避難経路・避難場所を考えておきましょう。

第4回 体験する

日時:2019年5月12日(日)13時から15時30分まで
場所:APU PLAZA OITA
参加者:72名(日本人24名、外国人36名、スタッフ12名)
スタッフ内訳(APU6名、市役所5名、ビービズリンクBIP1名)

活動の目標

- ・地震体験車や新聞スリッパづくりなどの体験を通じて、防災に興味を持つ
- ・アプリなどで、自分で防災について楽しく学べる方法を知る

活動の内容

- ①まちあるき&体験 … 実際に別府の町を歩いて、避難所・津波避難ビル、耐震貯水槽を巡る
防災の知識を身に付けるために様々な体験をする
- ②ワークショップ … 防災の知識を問う〇×クイズに答える
災害時に起こりうる状況について話し合う

活動の流れ

11:30 スタッフ集合

12:30 受付開始
グループ分け
お互いに自己紹介

13:00 はじめの挨拶

①まちあるき&体験

13:05

まちあるき&体験の説明

13:15

a.まちあるき

- ・避難所(小学校)
- ・津波避難ビル(デパート)
- ・耐震貯水槽

b.体験

- ・地震体験車
- ・新聞スリッパ
- ・地震ゆらゆらアート



☆混雑を避けるため参加者を
a.→b.の順で行うグループと
b.→a.の順で行うグループに
分けた

今回から冒頭で日本人の参加者向けに「やさしい日本語」を紹介した。「短い文で話す」「『です・ます』で話す」「漢語を使わない」などを意識して日本語を話すと、外国人にも伝わりやすいということを説明した。

まちあるき

地図を頼りに、避難所・津波避難ビル、耐震貯水槽がある場所を探し、写真を撮った。また、道にある海拔表示の写真も撮り、避難する際に危険な場所がないか探しながら歩いた。



ほとんど日本語がわからない外国人参加者もいるため、今回は「まちあるき」のタスクシートの英語版も作成した。また、何度も参加している日本人が外国人を助け、リードしている場面も見られた。

体験

・地震体験車

別府市の地震体験車を使用し、4人一組で、震度7を体験した。



・新聞スリッパ

地震発生直後に散乱物から足を守るための履物がないときに、新聞紙を使ってスリッパの代用品を作る方法を学んだ。

・地震ゆらゆらアート

折り紙を建物に見立てて細長く切りそれを揺らして、揺れの伝わり方や揺れ方が建物の高さによってどのように違うかを視覚的に学んだ。



帰って、お茶とおかして休憩

14:20

ふりかえり

グループごとに座り、しおりに
「気づき」を書く

全体共有

②ワークショップ

14:30

防災〇×クイズ



14:55

ケースの検討
全体共有

15:13

まとめとお知らせ

ふりかえり

避難所はどんなところだったか、デパートが閉店しているときはどうするか、貯水槽は何のために使うか、海拔表示にどんな情報があつたか、自宅の近くに避難所・津波避難ビルがあるか、などをグループで話し合った。

防災〇×クイズ

防災に関する知識を問うクイズを〇×形式で出題し、グループごとに「〇」「×」のカードをあげて解答した。いくつかのグループはその答えを選んだ理由も説明した。また、一問ごとに別府市役所防災危機管理課職員の詳しい解説を聞いた。

〇×クイズで使用した問題は「東京都防災アプリ*」から抜粋した。クイズ終了後に同アプリをはじめ、「おおいた防災アプリ**」など防災に役立つアプリやウェブサイトも紹介した。



ケースの検討

「大きな地震のため、避難所(小学校体育館)に避難しなければならない。しかし、家族だと思っている犬(ゴールデンリトリバー、メス3歳)がいる。いっしょに避難所につれていく?」
という問題を出し、YESかNOかでグループで話し合った。

出典:防災カードゲーム「クロスロード」市民編5009

各グループとも「犬が被災者の癒しになるのでは」「動物アレルギーの人もいるのでは」など想定される様々な事態を考えながら話し合っていた。また、この問題は7月に行う「クロスロード」ワークショップの宣伝も兼ねていた。

参加者からのコメント

- ・ケースの検討は考えさせられる問で有意義だった。
- ・英語を話そうとすることで交流できたし、クイズや起震車も新しい体験で楽しかった。
- ・来日して半年だが、新しいことを学び、自分の日本語のどこが不足か認識した(スタッフ和訳)

スタッフのふりかえり

- ・開始直前に多くの参加者が来場したため、グループ分けに時間がかかり、開始が遅れた。
⇒活動を詰め込みすぎずに余裕をもって予定を組む、時間調整用の余白的な時間を作る。
⇒告知のチラシには、早めに来場してもらうことを伝える。
- ・「まちあるき」と「体験」という二つの活動を同時進行で行ったが、混乱もなく進行できた。活動の順番をスライドに一覧表にして見せたり、名札にグループ番号を書いてメンバー同士がはぐれないようにした工夫がよかった。

考えてみよう!

料理中に大きな揺れを感じたら、一刻も早く火を消すべきである。〇か×か。(答えはp.15)

出典:東京都防災アプリ

*Note: 東京都防災アプリ <https://www.bousai.metro.tokyo.lg.jp/1005744/index.html>

**Note: おおいた防災アプリ <https://www.pref.oita.jp/soshiki/13550/oitabousaiappli.html>

防災カードゲーム「クロスロード」

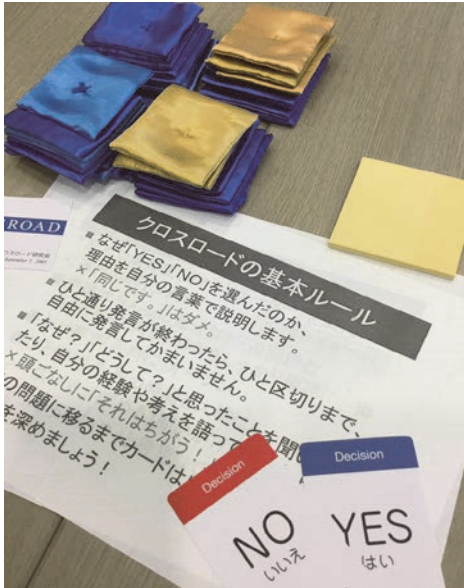
日時:2019年7月6日(土)10時から17時まで

場所:APU PLAZA OITA

参加者:午前の部51名(日本人36名、外国人8名、スタッフ7名)

午後の部26名(日本人18名、外国人1名、スタッフ7名)

スタッフ内訳(APU6名、ビービズリンクBIP1名)



◆防災カードゲーム「クロスロード」について

阪神・淡路大震災(1995年)で災害対応にあたった神戸市職員へのインタビューをもとに、2004年に作成されたカードゲーム形式の防災教材*である。東日本大震災以降、全国の危機管理・防災関係者から注目を集めている。この教材は、「子どもから大人までがゲーム感覚で楽しみながら防災対策について主体的に考え、他者との対話を通じて防災行動を促すこと」**を目的にしている。ルールはとてもシンプルで、カードに書いてある質問に対して、ひとりひとりがイエスかノーで答えるだけだが、だれもがどちらの答えにするか迷ってしまう質問になっているのが特徴だ。イエスかノーの答えだけでなく、選んだ理由も合わせて話すことで、自分とは異なる視点や価値観に気づける。

<カードの質問の例> ※質問はどれも100字程度

あなたは避難所の食糧担当。被災から数時間。避難所には3000人が避難しているとの確かな情報が得られた。現時点で確保できた食料は2000食。以降の見通しは今のところなし。まず2000食を配る?

Yes(配る) OR No(配らない)

出典:防災カードゲーム「クロスロード」神戸編1008

「クロスロード」はゲームなので、あえて自分の取る行動パターンの逆の答えを選択することもできる。そして、その理由を考えることは、普段と違った立場を考える機会にもなる。最近では、福祉や教育、多様化をテーマにしたものなど、防災以外のテーマでも深く対話できるゲームとして広がりを見せている。

◆ワークショップ

別府シールドでは2019年7月6日(土)に神戸クロスロード研究会***から西修(にしおさむ)氏を迎え、ワークショップを開催した。別府の人々がゲームを体験すれば日ごろの防災意識に磨きをかけられると思ったからである。

*Note: 開発者は矢守克也氏(京都大学)他で、「クロスロード」(登録商標番号4916923号)および「CROSSROAD」(登録商標番号4916924号)はチームクロスロードの登録商標である。

**Note: 報告「防災教育実践交流会2019・夏」2019年8月11日(日)キャンパスプラザ京都 主催NPO法人ROJE 関西学生事務局「災害と教育事業部 わたげプロジェクト」

***Note: 神戸クロスロード研究会:2005年に、神戸市職員を中心に、防災カードゲーム「クロスロード」の普及を目的として設立された団体。これまでに各地でワークショップを開催し、震災20年目の2015年に1000人規模のクロスロードを実現した。

ワークショップの構成

<体験クロスロード①>

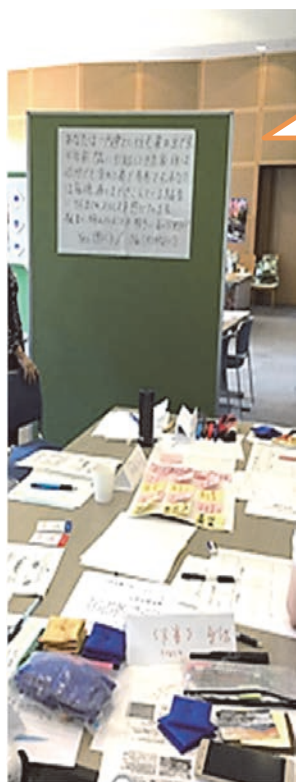
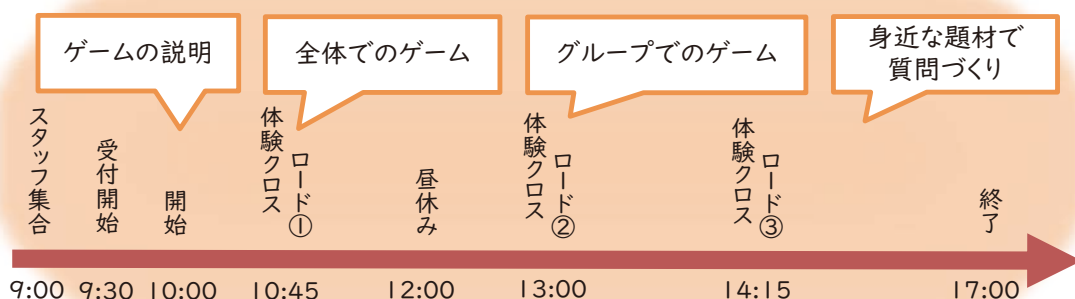
西講師の説明や体験談を聞きながら、全体で実際のゲームを4問体験した。

<体験クロスロード②>

各グループでゲームを進め、共通の質問でゲームを楽しんだ。自らゲームの進行をコントロールすることは、体験クロスロード③への橋渡しの時間となった。その後ゲームの強みと弱みについて分析する活動があり、このゲームの奥深さを知った。

<体験クロスロード③>

防災というテーマに限らず、ジレンマを含む身近な例を題材にして、質問を作成するという体験をした。グループで話し合いながら、1つの質問を作ること、身近な問題について様々な視点から振り返る時間にもなった。また、防災に取り組もうとしている人々にとっては、地域に合わせた質問づくりのノウハウを学び、大変参考になった。2時間は、あっという間に過ぎた。



<参加者が作成した質問>

あなたは一戸建ての家に住む主です。半年前、隣に引っ越してきた家族は近所でも変わり者で有名です。あなたは毎晩遅くまで聞こえてくる騒音に悩まされ、ストレスを感じています。騒音に悩んでいることを相手に言いに行く？

Yes (行く) OR No (行かない)

参加者からのコメント

- ・クロスロードという新しい体験をした。イベントの後、いろいろなことを思い出してもう一度考えてみたいと思う。
- ・「ゲーム」だからこそ普通じゃ言えない意見を言えたり、普通じゃ聞けない意見を聞いた。
- ・別府バージョンの問題を作って町内でやってみたいと思った。
- ・答えは出ないがその質問に対して悩むということが大切であると気づいた。
- ・悩み続けるのも大切だけど、質問されたときに「答えられる」準備は必要だ。
- ・また企画してほしい (意見多数)。
- ・ゲームを通して、考え、話し、時に意外な答えに触れることができた。

p.13「考えてみよう!」の答え: × (ゆれの最中に火に近づくのは危険です。ゆれが止まってから、あわてないで火を消します。)

5. しおりについて

しおりの構成



①グループメンバーの名前を書きましょう

- ・グループを作り、開始時間までの間、グループメンバーについて知る機会を作るため、メンバーの名前、国、好きなことについて話すタスクを作成している。

②グループの名前／番号を書きましょう

- ・開始時間まで、グループの名前を考えたり、グループごとに違う動きをするときは、自分が何番グループか確認できるように、グループ番号を書く欄を設けている。

③今日の流れ

- ・まちあるきとワークショップの流れと大体の時間が確認できる。

④災害に関係のあることば

- ・日本に住む外国人が日本語で知っておいた方が良いと思われる語彙を集めて掲載している。
- ・毎回のテーマによって少しずつ語彙を変更している。
- ・留学生には事前にクラスで冊子を配布し、語彙の意味を調べてくるよう指示している。
- ・グループができ、会が始まるまでの間、この語彙についてもグループメンバーと確認する。

⑤まちあるきタスクシート

- ・まちあるきで使用するタスクシートで、テーマによってタスクを変更している。
- ・災害時に役に立つ表示等、防災の知識として必要なものを地域の人と町を歩きながら探せるものをタスクとして課している。
- ・次のタスクまで歩く間も話がはずむように、歩きながら話すタスクもある。

⑥まちあるきふりかえりシート

- ・まちあるきから戻ったグループはこのシートを使いながら、まちあるきのふりかえりを行う。
- ・まちあるき終了後、タスクがやりっぱなしにならないよう、まちあるきのタスクに関する質問や気づきを問い、ふりかえりができるようにしている。
- ・全グループが戻り、ある程度グループでのふりかえりが終わったら、ふりかえりの内容を共有する。

⑦ワークショップ用資料

- ・各回のテーマに合わせて、ワークショップで使用する資料を提示している。
- ・テーマによっては、しおりの中に資料を入れず、別紙や模造紙等を使用することもある。

⑧役に立つ情報（サイト・アプリ）

- ・「別府市災害連絡掲示板」や「おおい防災アプリ」等、災害時に役に立つウェブサイトやアプリの情報を掲載している。その場で確認できるよう、URLとともにQRコードも入れている。

※p.17-p.21に実際に使用したシートや情報ページを掲載する。

「5. しおりについて(p.16)」の①-④

★グループメンバーの名前を書きましょう

名前	国	好きなこと・食べ物・人

★グループの名前を考えましょう グループ名：_____

今日のながれ (13:00～15:30)

時間	内 容
12:30	受付 グループで自己紹介・グループの名前を考える わからないことばのチェック
13:00	ディスカッション ①「避難所とは？」 ②市役所から避難所についての説明
13:20	まちあるき ①まちを歩く (10分) ②帰りながら、タスクをする (20分) ③プラザに帰って、見つけたこと・気がついたことを話し合う
14:20	ワークショップ ①地震の時の市役所の行動と避難所の運営についての説明 ②避難所で自分たちができることについて話し合う ③ケースの検討 (避難所で起こる事例について考える)
15:20	まとめ・アンケート・お知らせ

(第3回分)

①

開始時間まで、グループメンバーのことを知り、グループの空気をあたためる。

②

グループ名を決めることで団結力を高める。
グループによって違う動きをするときは、グループ番号を記入することもある。

③

一日の大体の流れを確認。

④

日本語で知っておくといざというときに慌てないことばのリスト。「警報、注意報、海拔、震度、余震、高台、高潮、洪水、停電、断水」なども記載されている。留学生は事前にしおりを受け取り、意味を調べておくことが当日までの宿題となる。

さいがい かんけい

災害に関係のあることば

知らないことばの意味をしらべてください。

ことば	Meaning
1. 災害 (さいがい)	
2. 防災 (ぼうさい)	
3. 避難 (ひなん)	
4. 避難所 (ひなんじょ)	
5. 津波避難ビル (つなみひなんビル)	
6. 避難指示 (ひなんしじ)	
7. 避難勧告 (ひなんかんこく)	

(第3回分)

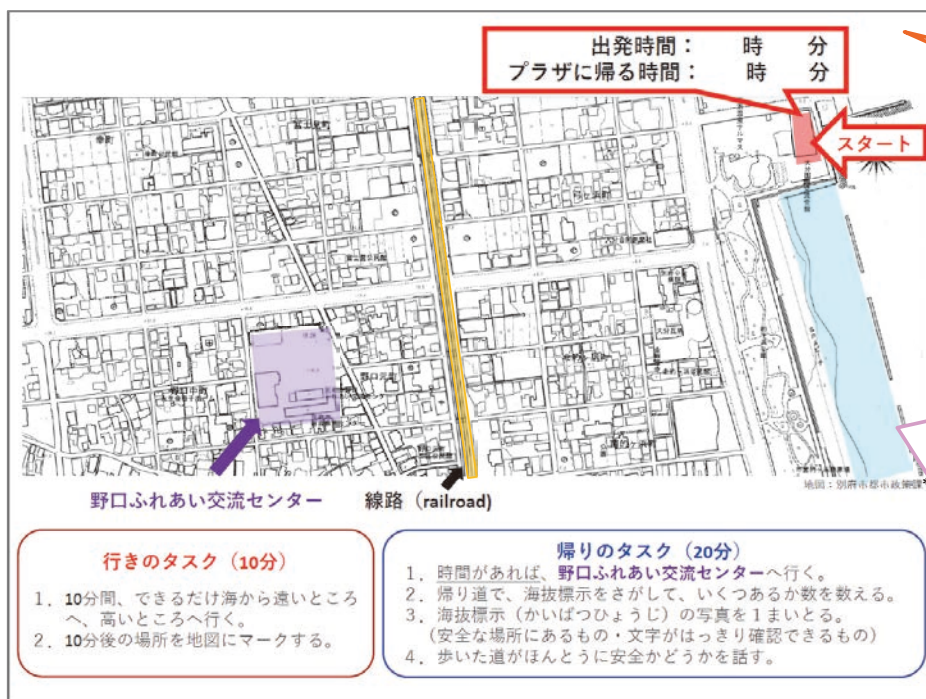
「5.しおりについて(p.16)」の⑤

まちあるきタスクシート

第2回（テーマ：津波）



第3回（テーマ：避難所を知る） ※しおりとは別に配布



*Note: 地図は別府市都市政策課のものを使用。

「5.しおりについて(p.16)」の⑥

まちあるきふりかえりシート

第2回（テーマ：津波）

話して歩きながら気がついたこと

いいところはどんなこと？ 悪いところはどんなこと？



もっとよくするためには、どうしたらいいか。

自分たちでできることは？



第3回（テーマ：避難所を知る）

★「まちあるき」から帰ってきたら、グループで話しましょう

歩きのタスク

10分で高い場所・安全な場所まで行けた？

10分で歩ける距離は長い？短い？

どうして、その道・ルートを選んだ？

荷物が多かったら、子ども・けが人がいたら、
10分でどこまで行けると思う？

帰りのタスク

海拔表示をいくつ見つけた？多い？少ない？
海拔表示にどんな情報があつた？

海拔表示だけを見て、避難所まで行けそう？
海拔表示を見て、何か気がついたことは？

歩いた道は、地震の後でも、夜でも、安全？
危ないところはあった？

避難所に行ったグループだけ話してください
避難所(野口ふれあいセンター)を見てどう思った？

その他（時間があったら話しましょう）

- ・10分で避難所まで行けなさそうだったらどうする？
- ・自分の家の近くの避難所を知っている？
- ・避難所に何を持って行ったほうがいい？
- ・地震・津波の情報をどうやって手に入れる？



第3回からはふりかえりの内容をより具体的にした



「5.しおりについて(p.16)」の⑦

ワークショップ用資料

第3回（テーマ：避難所を知る）

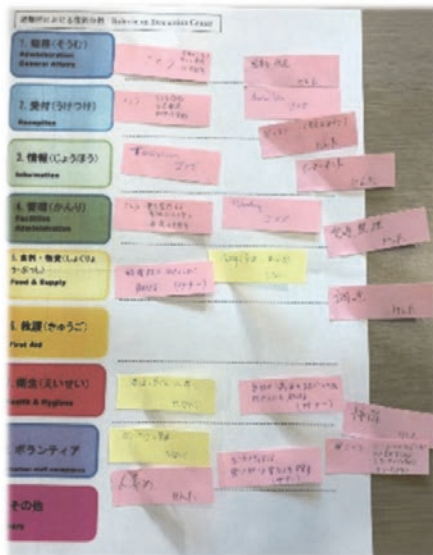
避難所における役割分担 Roles in an Evacuation Center	自分は何ができるでしょうか。 Things that you can be of help
1. 総務(そうむ) Administration General Affairs <ul style="list-style-type: none"> ・ 全体のミーティング Call for a role-leader meeting ・ 市役所職員と連絡をとる Communicate with municipal staffs ・ 避難所レイアウトを指示する Job assignment & disposition ・ 避難所の状況報告 Make status reports 	1.
2. 受付(うけつけ) Reception <ul style="list-style-type: none"> ・ 避難者を受け入れてリストを作成する (車中避難者、在宅避難者も) Accept citizen and make a name list ・ 住民の安否を確認する Confirm the safety of areal members ・ 郵便物を受け取る Handle/relay the mails 	2.
3. 情報(じょうほう) Information <ul style="list-style-type: none"> ・ 情報を集める(病院、交通、災害など) Collect information on hospitals, transportation, area, etc. ・ 情報を知らせる Make announcement ・ 取材に協力する Accept media interviews 	3.
4. 管理(かんり) Facilities Administration <ul style="list-style-type: none"> ・ 車を整理する・火事や犯罪を防ぐ Watch parking, obtain car-related information and prevent fire and crimes ・ 禁煙ルールを示す Implement a no-smoking/no-drinking policy ・ 昼・夜の見回り Patroling 	4.
5. 食料・物資(しょくりょう・ぶつし) Food & Supply <ul style="list-style-type: none"> ・ 食料やものを調達する Find and obtain foods and supplies ・ 食料やものを管理する、分ける Manage supplies and divide accordingly ・ 炊き出しをする Prepare hot meals 	5.
6. 救護(きゅうご) First Aid <ul style="list-style-type: none"> ・ 病人やケガ人を世話する Care for the sick & the injured ・ サポートが必要な人の確認と支援・全体の健康管理 Find and support the people in need of care and check for the every body's health ・ 見回り Patroling 	6.
7. 衛生(えいせい) Health & Hygiene <ul style="list-style-type: none"> ・ きれいな水を用意、管理する Obtain water and control water supply ・ 病気を防ぐためにきれいな環境を管理する(トイレ、ごみはこの設置、掃除、ルール作り) Create and maintain cleanliness (toilets, lavatory, garbage boxes) ・ ペットの取り扱い管理 Make and control the pet-related rules 	7.
8. ボランティア Volunteer staff acceptance <ul style="list-style-type: none"> ・ どこでどんなボランティアが必要かまとめる Organize the volunteer needs ・ 避難所内でボランティアを集める Assemble and gather volunteer staff from the evacuated people ・ 外からのボランティアを受け入れる Accept the volunteer staffs 	8.
9. その他 Others <ul style="list-style-type: none"> ・ ・ 	9.

左のページは避難所における役割分担と仕事内容*を記載し、それを読んで、右のページに自分ができそうなことを記入。



*Note: 別府市が行っている避難所訓練のグループ分けを参考に作成した。

グループで共有



役に立つ情報 (Useful Information)



別府市災害連絡掲示板

(Beppu City Disaster Message Board)

<https://ja-jp.facebook.com/BeppuDisasterMessage/>



BIAD Beppu Interpreters-in-Aid at Disasters

<https://www.facebook.com/groups/1058283347598371/>



おおいた防災アプリ

<https://www.pref.oita.jp/soshiki/13550/oitabousaiappli.html>



【AppStore】



【GooglePlay】

東京都防災アプリ(Disaster Preparedness Tokyo App)

<https://www.bousai.metro.tokyo.lg.jp/1005744/index.html>



iOS



Android

Safety tips for travelers

<http://www.jnto.go.jp/safety-tips/pc/index.html>



UDトーク(コミュニケーション支援・会話の見える化アプリ)

UDTalk (Communication application)

<http://udtalk.jp/en/>



6. 準備について

準備から開催まで(+その後のお仕事)

イベント企画の会議は通常、イベント予定日の3か月前から始める。それと同時期に市報への掲載の手続きをする。(自治体によって市報掲載情報の締め切りは異なる。)以下、いつ何をしてきたかをまとめる。

	いつ	何をしたか	
ステップ1	イベント 3か月前	イベントのテーマ・内容を決める 会場を決め、予約する	講師を招聘する場合は半年から1年前に講師に連絡を取る
ステップ2	2か月前	市報への掲載を依頼する チラシ(データ・紙)作りを開始する しおり作りを開始する	
ステップ3	1か月前	参加者の募集を開始する ・チラシをSNSやメールで配布 ・大学クラス内で、チラシを配布 ・大学のウェブページでイベントを告知	Facebookで告知する 過去の参加者にメールを送る 学生は申し込みを紙で提出する
ステップ4	1週間前	学生の募集を締め切る しおりを印刷する しおりをクラスで学生に配布する 事後アンケート用紙を作成する	学生にはしおりを読み、言葉を調べてくることを宿題とする
ステップ5	3日前	買い出し(お茶・おかし等)をする	
ステップ6	2日前	学生以外の参加者募集を締め切る 参加者名簿を完成させる 参加予定者に確認メールを送付する 当日スケジュールと担当の確認をする	名簿はグループ分けのために日本人と外国人を分けておく
ステップ7	当日	当日の参加者数を集計する 事後アンケートを実施する スタッフの反省会を開く	
ステップ8	1週間 以内	参加者数、良かった点、改善点、今後の見 通し等のまとめをスタッフで共有する	

ステップ7とステップ8は次のイベントへ向けての大切な一歩となる。ここで出た改善点やアイデアを次回開催時に反映できるように、皆で共有しておく。

くどんな人々に参加を呼びかけているか>

一般の方：災害時通訳ボランティア、ビービズリンクBIPの各種講座の受講者、防災関係法人関係者、防災士、日本語教育関係者など

学生：日本語中級以上の日本語がわかるAPUの留学生*、市内他大学の学生

行政：市役所職員(近隣の自治体含む)、消防署職員、県庁職員

*Note:日本語中級クラスでは、地域のイベントに参加し、レポートを書くことで成績にポイントが加算される。防災まちあるきもその対象になるイベントの1つである。

利用した施設



<ワークショップの会場として>

利用した施設・・・別府市役所レセプションホール、APU PLAZA OITA、
別府市社会福祉会館

主に市の施設を会場とした。市役所やビービズリンクBIPの協力により、無料で利用できた。100人程度収容可能で、可動式の机、椅子、スクリーンなどが備わっている場所を選んだ。プロジェクター、ワイヤレスマイク、スピーカーなど、施設にないものは持ち込んだ。

活動で役に立ったもの

<ワークショップでの意見交換>

●付箋(粘着メモ)、模造紙、水性マーカー

…まず、個人ワークで、付箋に自分の気づきや考えを書きだす。その後、グループワークで、1枚の模造紙に付箋を貼って整理する。グループで、お互いの意見を知り、深めるのに有効。地域の人と留学生で付箋の色を変えると、比較して考えることもでき、新たな発見にもつながる(p.7参照)。水性マーカーを使えば、机を汚す心配がないのでおすすめ。

●ホワイトボードシート、ホワイトボードマーカー、マーカー消し

…壁やパーテーションに貼って使えるシート版のホワイトボード。シートを必要な大きさにカットして使用する。グループ全員で作業ができ、成果物を発表するときにも役に立つ。

<グループ対抗のクイズ>

●「○」「×」カード

…防災の知識を問うクイズ、まちあるき後の確認クイズでは、テンポよく進めるために、A4サイズの「○」「×」カードをグループに1枚ずつ配布。グループで話し合っ、答えを決める。司会の合図で一斉に答えを提示すると、盛り上がる(p.13参照)。

●小さいホワイトボード、ホワイトボードマーカー、マーカー消し、A4サイズのクリアファイル

…○×形式ではない場合、ホワイトボードが役に立つ。A4サイズのクリアファイルに白い紙を挟めば、ホワイトボードの代用品として使える(クリアファイルにマーカーで答えを書く)。持ち運びも簡単。

<グループ分け>

●参加者名簿

…参加希望者には申し込みをお願いし、事前に名簿を作成。名簿をもとに、参加者数の見込みをつければ、グループ分けの参考となる(もちろん飛び入り参加も歓迎した)。

●グループ番号

…地域の人と留学生の混合グループになるように、受付で振り分ける。テーブルごとに、A4サイズに印刷されたグループ番号を貼っておくと、来場者をスムーズに席に案内できる。

●名前シール、水性マーカー

…参加者は受付から開始時間までに、シールに名前を書いて胸に貼っておく。名前だけでなく、グループ番号も書くといい

7. 参加者・スタッフのコメント



参加者の声



別府の防災イベントは楽しくて、実践的で、上手に構成されていました。チームで活動し、指定された安全な場所へと歩いたり、非常食を食べたり、非常時に必要なアイテムを確認したりしました。イベントに参加して、別府でもっと災害時への備えができました。

キンバリー・セビニー (アメリカ)

2015年のネパール地震で悲しい経験した私にとって、日本に来るとき一番怖かったのは津波や地震などの災害でした。しかし、防災まちあるきに参加して、私は安心することができました。APU、ビービズリンクBIP、別府市の皆様に感謝しています。

セルパ・ペンバ・ラハム (ネパール)

この活動を通じて、日本はどれだけ災害に対して準備をしているのかわかりました。日本の最新技術や災害に対する教育を知り、私の国も本当に学ぶ必要があると感じました。このような機会に感謝し、自分自身を守り、また、多くの人を助けるために学んだ知識を使いたいと思います。

趙 翔昊 (中国)

突然起こる災害は怖い。対応する知識がないのはもっと怖い。避難所のこと、正しい情報を得ること、人とつながること等学んだ。今回、得たことをイザという時に役立てたい。早速、自分の居住エリアの避難所、避難経路を確認した！

飯塚 満里子

防災知識はもとより街を知る・人を知る・地球を考えることの大切さに気づく、正に、様々な人・コンテンツがmingleする(混ざる)学びの場。新しいアプローチ、行政と民間の連携モデルとして広めるべきである。

池部 るみ子

グループでまちを歩きながらタスクをこなしていく方法はとても楽しく有効でした。津波避難ビルの掲示を実際に見て、いろいろな場所にも同じ掲示があるのに気づくようになりました。また、地震体験車で震度6を体験できたのも貴重でした。

加藤 多嘉子

まちあるきに参加し、周囲には文化の違いのある他国から来ている人がいる事、これまで意識する事のなかった標識や避難場所など、気づいた事が沢山ありました。自分の住んでいるまちを知る事、人を知る事の大切さ、防災の意識を持つきっかけとなりました。

武田 美保

留学生と一緒に楽しく協働して学べる防災まちあるきは、あたたかくて、おもしろくて、命を守るために役に立つ活動。顔を合わせて一緒に考えることで生まれた信頼や体験はきっと、有事のときに生きると感じました！

立山 愛

語学力に乏しい小生でも、気軽に参賛出来、且、留学生との交流を図りながらの防災学習では、多事発見もあり、速(とて)も勉強になりました。次回も楽しみにしていると共に、皆様方のご尽力に対し頭の下がる思いです。

別府市防災士 中村 圭志

4年前別府で地震発生。境川体育館に外国の学生約50名が避難してきた。その経験を踏まえ、まち歩き会を知り学生さん達と出会い、話し合う事で災害に対して意識の向上と知識を深め、対策を前もって考えて欲しいと願っています。皆様に会えて、感謝です。

別府市防災士 那須 文夫

「防災の町歩き」という事を意識することによって防災の為の表示や避難場所等知る事が出来て、また問題点も見えて来ました。多様性の社会では、誰にも理解できる分かりやすい表記等の取り組みが必要だと思いました。

松浦 宏治

今までの防災訓練や研修とは違い、様々な世代、国の人と異文化を体験しながら別府の防災も学べる素晴らしい活動です。これからも積極的に参加します。

宮崎 裕二



スタッフのつぶやき



自然災害は人間の予測をはるかに超えて起こりうる。その災害に人は勝てない。しかし、これまで人々は多くの災害を乗り越えてきた。そしてそれは人の力であった。誰にでも「どうしたの?」と声がかかけ合える社会。そして、だれ一人、取り残されない社会をめざして。

APU教員 石村



毎回、地域の方と留学生が一緒にまちを歩き、楽しんで活動をしている姿を見て、この活動に関わられてよかったと思います。そして、次は何をしようかなとみなさんの楽しそうな顔を思い浮かべてわくわくしています。楽しませてくださってみなさんに感謝しています。

APU教員 板井



防災まちあるきにスタッフとして携わる中で、毎回多くの気づきと学びがありました。様々な背景をもつ人々が暮らすこのまちで、いざというときに周りの人と支え合い、困難を乗り越えていけるよう、この防災まちあるきでの経験が少しでも役に立っていると嬉しいです。

APU教員 井上



このような有意義なイベントのお手伝いができて、大変うれしいです。文化や言葉の壁を越え、一緒に熱心に学ぶ皆さんの姿にいつも刺激されています。私もいつまでも学ぶ心・助け合いの心を持ち続けたいものです。

APU教員 高田



別府に来て7年。ここが「私のまち」といえるようになったのは、地域とつながりができてからのこと。きっかけは防災まちあるきだった。いつか起きる災害に立ち向かっていけるよう、ひとりひとりが盾（シールド）を構えよう。そして、その盾をともに支えよう。

APU教員 吉村



現在は別府を離れておりますが、防災まちあるきが続けられ、多くの反響をいただいているとのこと、大変嬉しく思います。ロゴマークは私が作ったものですが、別府の皆さんの笑顔と生命、温泉のある日常を守るというコンセプトで作成しました。

元APU教員 岩本



「防災まちあるき」活動を通して、たくさんの人と出会いました。私はもともと出不精ですが、この活動に関しては確信をもって計画を立て、様々な人に会うために外に出かけ、話をしました。3年先を見ながら活動が続けられたらと願っています。

元APU教員 豊田



別府市に住んでいた間、防災まちあるきに参加し、その後少し手伝いもしました。防災に付いて何も知らない自分に吃驚（びっくり）しました。避難の仕方を学んで良かったと思います。皆にもぜひ参加してほしいです。

APU卒業生 イサ（パーレン）



多文化が心地よく入り混じる別府ならではの活動「防災まちあるき」は、温泉のようにボーダレスであったかい取組み。互いに顔を合わせ、楽しくタスクをこなし、どんな時にも誰もが安心して住める町を、皆んなで一緒に作る場所！

ビービズリンクBIP 神



皆さん、災害への備えはできていますか？ 別府市防災マップには危険な場所や自分で準備できることなどが書いてあるので再確認してみましょう。防災まちあるきで経験したことを周りの人に教えて皆で防災力を高めていきましょう。

市役所防災危機管理課 松島



防災まちあるきに参加すると、出会ったことのない国の方や、魅力的な地元の方といういろいろなお話をすることが出来ます。別府のような多文化共生の街で、お互いに助け合うことを学べる機会がありがたく思っています。

市役所文化国際課 高木



海拔標示や津波避難ビル、避難所案内図など... 普段何気なく目にしていたものがとても意味あるものだということに改めて気付くきっかけになりました。日本人、外国人関係なく、誰にでも優しいまちに☆

市役所文化国際課 松岡



8. おわりに

これが約2年間の活動のまとめです。



私たちはこの2年間で外国人と日本人が共に防災について学び、お互いがつながるための取り組みをしてきました。地域に住んでいる外国人はお客さんではなく、その地域の一員です。日本人はおもてなしを重んじるといわれていますが、外国人をもてなすのではなく、お互いがおもしろいやりを持って住みやすいまちを一緒に作っていくことが、これからの多文化共生社会において重要です。

地震後に行われた調査では、日頃から外国人との交流がある日本人は地震の際に外国人の行動に対して好印象を持ったのに対して、交流がない人はあまり良い印象を持っていないことがわかりました。やはりお互いを知ることは共生への大きなカギだと言えます。

この「防災まちあるき」は、単に留学生が防災に興味を持つきっかけとなっただけではなく、まちを知り、人を知り、地域の日本人とのつながりを持つ場になったと思っています。また、この活動を通して、大学、市役所、地域団体、住民とさまざまなつながりも生まれました。参加者それぞれが地域の一員として一緒に活動し、立場や文化の違いを超えて話し合うことで、お互いの見えていなかった部分に気づけたのではないのでしょうか。

お互いの顔が見え、みんなが声をかけ合える。そんな別府になることを願いながら、今後もこの活動を続けていきたいと思っています。

別府シールド



参考文献

こうべまちづくりセンター(2005)『神戸まちづくり委員会「宙」こうべまちづくりセンターレポート宙Vol.2, 2005, 特集、WSの本、神戸まちづくり参加のレシピ』

住田環・渡辺若菜・板井芳江・加藤みゆき・前田京子(2017)「熊本地震における留学生の行動傾向—アンケート調査結果の分析から—」『APU言語研究論叢第2巻』18-32p

田村太郎(2017)「地域における多文化共生の現状と日本語教育推進の期待」
<http://www.nkg.or.jp/wp/wp-content/uploads/2017/04/20170426-4.pdf>

Dr.ナグレンジャーナグレンコ「感性でとらえる共振現象の科学おもちゃ」防災科学技術研究所2016年3月
http://www.bosai.go.jp/activity_general/ekky/yurayura.pdf

平成28年熊本地震熊大黒髪避難所運営記録集「416私たちがやったこと、未来へ伝えたいこと」“416”編集委員会2017年3月http://coc.kumamoto.ac.jp/archives/type_student/881(2020年2月閲覧)

平成28年熊本地震の記録(最終報告)—震災からの創造的復興をめざして—
別府市役所ホームページ <https://www.city.beppu.oita.jp/>

堀公俊・加藤彰(2008)「ワークショップ・デザイン知をつむぐ対話の場づくり」日本経済新聞出版社

本田明子他(2016)「熊本地震の事例にみる日本語教育の課題」2016年度日本語教育学会秋季大会口頭発表, 松山市ひめぎんホール, 2016年10月9日

謝辞

本活動は、高橋産業経済研究財団(公財08-003-142代表石村文恵)の助成を受けています。これまでの活動、また今回このような冊子が作成できたことも財団のサポートのおかげです。

「楽しく続ける」というアドバイスをくださった熊本大学の竹内裕希子先生、ならびに「活動を続けるには今後3年分の計画を練っておくこと」という助言をくださった岐阜大学の小山真紀先生に深く感謝申し上げます。

そして、この活動の運営に関わってくださった皆様、ご参加くださった皆様に心より御礼申し上げます。

2020年2月28日発行

執筆者

石村文恵 (立命館アジア太平洋大学)
豊田真規 (元立命館アジア太平洋大学、現神戸市外国語大学)
井上佳子 (立命館アジア太平洋大学)
吉村依里 (立命館アジア太平洋大学)
高田亮 (立命館アジア太平洋大学)
板井芳江 (立命館アジア太平洋大学)

お問合せ

立命館アジア太平洋大学 言語教育センター 石村文恵
メールアドレス: ishimura@apu.ac.jp

The booklet for the activities of
engaging “Disaster Prevention
Town Walking”
English version

From December 2017 to July 2019



Beppu Shield

APU × Beppu City Hall × B-biz LINK BIP

Table of contents

1. Introduction	28
2. Background of the activity	29
3. Purpose of the activity	30
4. Records of activities	
The 1 st disaster prevention town walk “To evacuate” (December 10 th , 2017)	31
The 2 nd disaster prevention town walk “Tsunami” (May 13 th , 2018)	33
The 3 rd disaster prevention town walk “Get to know the shelter” (November 11 th , 2018)	35
The 4 th disaster prevention town walk “To experience” (May 12 th , 2019)	37
Training session of “Yasashii Nihongo” (February 9 th , 2019)	39
Disaster prevention card game “Crossroad” (July 6 th , 2019)	40
5. About booklets	41
6. Comments from participants and staff of these events	43
7. Conclusion	45



1. Introduction

At Ritsumeikan Asia Pacific University (APU) located in Beppu city in the Oita prefecture, there are about 3,000 international students who are from about 90 different countries and lands. In April, 2016, Beppu was struck by an earthquake with an intensity of a lower six on the Japanese scale. Some of the international students of APU spent several terribly anxious days, since some of them just entered the university that month, and had very little Japanese speaking ability.

The experience spurred five Japanese teachers to volunteer to start “Walking around town for disaster prevention” with the cooperation of general incorporated association B-biz LINK BIP and the Cultural and International Affairs Division of Beppu City hall in December, 2017. The purpose is, to create opportunities for international students to learn and acquire knowledge of disaster prevention; also it is to create a chance for them to go out on the town, to know the town, and to connect with people. Additionally, it would be a great opportunity for the local Japanese people to interact with some new values by associating with international students who come from different backgrounds. Isn't it necessary for all of us to think and to find out what we ourselves can do, others can do, as well as get to know each other, rather than someone protecting someone when disaster strikes?

This brochure contains about four episodes of walking around town for disaster prevention and two episodes of workshops, the efforts of the staff, comments from the participants, and issues that were faced. After starting in December, 2017, we still deal with some challenges, however we would be delighted if this brochure can be somewhat useful in the disaster prevention effort in other areas.



2. Background of the activity

The obstacles the international students faced with the earthquake

We performed research regarding actions of the international students and the Japanese after the earthquake of 2016. In the questionnaires for the international students, there were many comments regarding information such as, “I had hard time to determine what the right information was” and “There was no information in English.” Also for the interview research, there was an international student who answered that he has been taught in his country to flee outside instead of to the shelter in case of an earthquake. As just described, we discovered that the international students have difficulty in understanding the emergency information at the time of a disaster, and also they have been taught different information about disaster prevention than that of Japanese people.

The geographical issue of the university

For the international students of APU, they must live in the dormitory on the university compound for the first year. Since APU is located at the top of a mountain, and it takes 40 minutes by bus to go downtown, the students rarely go into town. It creates the issue of international students not having much opportunity to interact with the town and locals.

The issue of foreigners support for Beppu city

The population of the Beppu city is 116,974 (November, 2019), among which 3.7 % (4,371) are foreigners. Although it is a multi-cultural city as noted, there is no facility to provide continuous support to foreigners such as an international center in Beppu city, so there is no place to flee when there is trouble, such as in the case of a natural disaster.

With those factors in mind, we started the “Walking around town for disaster prevention.” Currently, we are continuing our activity under the name of “Beppu shield” which is organized with not only the teachers of APU, but along with the international students of APU, Cultural and International Affairs Division, and Disaster Prevention and Crisis Management Division of Beppu City hall, as well as B-biz LINK BIP. The “shield” came from the English word ‘shield’ containing our wish to “protect Beppu together.” Also its symbol mark represents the Beppu hot spring, life and consideration, and the people’s smile.



3. Purpose of the activity

To acquire knowledge about disaster prevention

Obtaining knowledge that will contribute in making judgments and in taking action ⇒ Gaining stock information* through discussion

To know the town

Getting to know the town in order to be able to take action
⇒ Being aware of disaster prevention and take it personally

To connect with people

Getting acquainted with one another in a peacetime
⇒ Enables us to help one another during times of disaster, contributing to the mutual understanding



Why “Walking around town?”

We thought that simply having a class room lecture has some limitations in applying it in practice, thus we chose to “walk around town” which enables us to 1) get to know the town, 2) acquire knowledge through our own experience and with our own eyes, and 3) to be enjoyable as an orienteering.

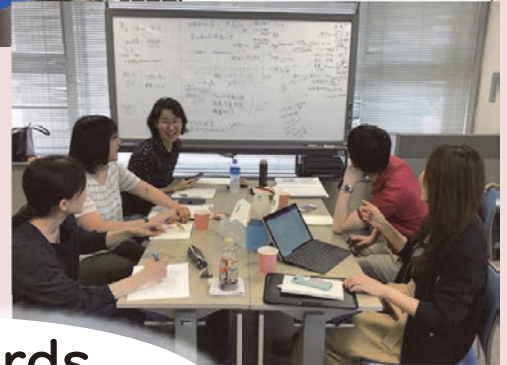
Also, throughout the activity, we had a concept of “practicing, reflecting, sharing, and leading to the next step” in mind when making the plans. Each time, we had two parts such as “walking around town” to acquire knowledge by actually walking, experiencing, and listening, as well as the “workshop” to reflect the experience by sharing opinions in groups. We expected, the knowledge to be remembered more by actually experiencing it, more would be realized by their own recognition and that of the group members, and encouraged them to listen carefully for the reasons and basis for the opinions of one another in the discussion. In addition, we tried to keep in mind of leading it to the next step, by taking further action after getting home, such as checking the closest shelter from home and reflecting the things that were discussed.

For each “Walking around town for disaster prevention” page, the overall activity flow is written in the light blue box on the left, and detailed information is given in the markup balloon. And below that we wrote the staff’s comment about the purpose of the activity, and the effort made, as well as the “Let’s think” section for you to read and think with us.

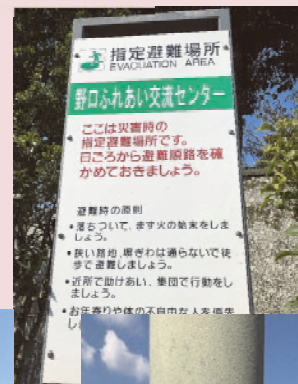
The summary of the overall activity (Detailed information is given in each episode)

	Date	Participants	Theme	Contents
The first Walking around town for disaster prevention	December, 2017	55 people	‘To evacuate’	<ul style="list-style-type: none"> · Checking the shelters and signs · Talks about disaster prevention and a quiz
The second Walking around town for disaster prevention	May, 2018	89 people	‘Tsunami’	<ul style="list-style-type: none"> · Checking the Tsunami refuge buildings · Talks about Tsunamis and a quiz
The third Walking around town for disaster prevention	November, 2018	78 people	‘Get to know the shelter’	<ul style="list-style-type: none"> · How far can a person walk in 10 minutes · Get to know each one’s role in the shelter
Workshop	February, 2019	40 people	Training session of ‘Yasashii Nihongo’	<ul style="list-style-type: none"> · The basics of “Yasashii Nihongo” · Practice session of “Yasashii Nihongo”
The fourth Walking around town for disaster prevention	May, 2019	72 people	‘To experience’	<ul style="list-style-type: none"> · Checking the shelters and parks · Experiences of an earthquake and crafts · Disaster prevention quiz
Workshop	July, 2019	51 people	Disaster prevention cardgame ‘Crossroad’	<ul style="list-style-type: none"> · Experience of ‘Crossroad’ · Practice session for making the ‘Crossroad’ questions

*Note: When a man takes an action, the accumulated information (=stock information) that is pre-provided and education / training that the person has received will be the start line (Tamura, 2017, P3)



4. Records of activities



The first To evacuate

Time and date: December 10th (Sunday), 2017 10a.m. - 12p.m.
Location: Beppu station to Beppu City hall
Number of participants: 56 (Japanese: 22, Foreigner: 24, Staff: 10)
Detail of staff members (APU: 5, City hall: 3, B-biz LINK BIP: 2)

The goal of the activity

- By walking around the town, acknowledge the location of shelters and how to evacuate in case of emergency
- Enhancement of future disaster drill participation and expansion of awareness

The contents of the activity

- 1) Walking around town ... Take pictures of the map of the shelter location, find the shelter on the card, and head to the city hall
- 2) Workshop ... Discussion about things recognized by walking around town, disaster prevention quiz and explanations

The flow of the activity

9:00 Staff meet up
9:30 Reception open

1) Walking around town

9:45 Explanation is given how to walk around town to each group, and start

Task 1

Take a picture of the shelter map
Receive the destination card



Map of the shelter location
Destination card

Task 2

Take a picture at the front of the directed shelter as a group
(Visit 2 shelter locations)

Task 3

Take a funny-pose picture in front of the water storage tank in Beppu park



Grouping

We made groups with a mixture of 2-3 both Japanese and foreigners, and tried to create a friendly atmosphere by asking names and likes / dislikes to one another.

Walking around town

We went to the shelter that was indicated on the destination card as a group, and took a photo as a proof. A sticker was given as each task was completed. We did not use cellphones, but instead, we asked group members and passers-by and headed to the city hall.



Activity program booklet (Task-sheet)

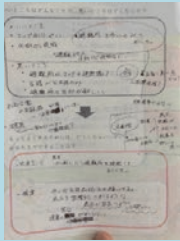
The task-sheet contained the feature of a stamp-rally so that the participants could enjoy a sense of accomplishment like playing a game. Also, some questionnaires were provided for the group members to share their earthquake experiences while walking together.

Since most of the group members met there for the first time, the atmosphere was tense at first. However while walking and completing the tasks together, they seemed to be more relaxed by the time they got to the city hall, thus they were able to smoothly carry on to the group activity. We prohibited the use of cellphones when finding the shelter for safety considerations, as well as to help them to recognize the need to ask someone for help in case of an emergency. Also, we chose road signs and structures that are normally not recognized but are visible when actually walking there, as well as different shelters such as elementary schools and community centers with hot springs. Some have commented that discussing the questioner was not easy since the sidewalk was narrow and they needed to pay attention to the road.

2) Workshop

10:50

Arrived at the city hall
Sit as a group, and write
down the "recognition
points" on the program
booklet



11:00

Share the recognition points
with the group
Share it with everyone

What we can do
Persons → discussion
Share it with everyone



11:40

Quiz Time
Commentary from the city
hall

12:00

Summary and
announcement

Recognition points

What was good and bad?

- Comforting to know that there are many shelters
- The shelter mark was not clear so I didn't think that it was a shelter
- There are no signs, so I didn't know how to get to the shelter
- Having a hot spring in the shelter is great for hygiene
- Couldn't find the water storage tank since the map in the park was dirty
- Not so foreigner friendly since there was no English writings
- The vending machines in the Beppu park was the rescue vender type

How can we improve? What can we do?

- The signs can be cuter and made to stand out more
- When creating maps, reflect the opinions of various generations
- Check where the shelter is when moving to a new house
- Request the city to create multi-lingual signs
- Be acquainted with the locals

By sharing what each one recognized, we were able to hear various opinions. There were some Japanese students who participated in it who were originally from Osaka and Kobe. They shared with us the efforts of their hometowns such as shelter stickers being posted in various spots, school lunches being available as emergency meals, and mandatory evacuation drill participation by the exchange students. As for Beppu, solid disaster measures have not been laid out since not many major disasters have struck here. This is the time for our community to seriously consider them as a whole.

Quiz Time

Utilized Kahoot!* to answer a quiz regarding earthquakes as a team, and the group that took first place received pens as prize from the city hall.

Staff reflection

- Reality and liveliness were promoted by evacuating to an actual shelter.
- The water storage tank in the large park was difficult to find and took an unexpectedly long time
⇒ When scheduling, extra time should be added in order to adjust the time accordingly.
- Although there were some in the group who understood English, it was difficult to understand about the theme of disaster prevention fully without some language support.
⇒ Utilize easy Japanese and an interpreter for the description slides and the discussion.
- Since there was nobody with professional knowledge regarding disaster prevention, the explanation of it was done superficially.
⇒ Enhance knowledge by asking for professional help.
- As we made the groups in order of arrival, the nationality of the group was unbalanced at the end.

Let's think!

Which country gets the most hit by the earthquakes in the world? (As of 2017) (The answer is on p.34)

*Note: Kahoot! is teaching material used in school education, that can be created through the internet, which uses various quiz-type methods. Both privately and groups can participate in answering it and able to actively join the activity. <https://kahoot.com/>

The second Tsunami

Time and date: May 13th (Sunday), 2018 13p.m. – 15:30p.m.

Location: APU PLAZA OITA to Social Welfare Hall*

Number of participants: 89 (Japanese: 36, Foreigner: 42, Staff: 11)

Detail of staff members (APU: 5, City hall: 5, B-biz LINK BIP: 1)

The goal of the activity

- By walking around the town, acknowledge the location of the shelters and how to evacuate in case of a Tsunami
- Enhancement of future disaster drill participation and expansion of awareness

The contents of the activity

- 1) Walking around town ... By utilizing the actual disaster prevention map of Beppu city, walk the directed route as groups while checking the signs for above sea level /Tsunami refuge buildings / shelters
- 2) Workshop ... Discussion about things recognized by walking around town

The flow of the activity

11:30 Staff meet up
12:30 Reception open
13:00 Lecture about Tsunami

1) Walking around town

13:25 Explanation given how to walk around town

- ☆ Distribution of disaster prevention maps (booklet) with route

13:30 Walking around town start

Task with the above sea level sign

- Take some pictures of the sign
- Check how many meters above sea level it is
- Check other information mentioned on the sign



Task with the Tsunami refuge buildings

- Check how many levels the building has
- Take pictures in front of the sign of the Tsunami refuge building as a group



Task with the shelters

- Discuss if the shelter was easy to find / regarding its features
- Take a funny-pose picture in front of the shelter

Lecture about Tsunami

Before heading out to walk around town, a lecture regarding areas above sea level of Beppu city, the time span of a Tsunami reaching the city, dangerous zones when fleeing, self-assistance, mutual-assistance, and public-assistance was given by a staff member of the Disaster Prevention and Crisis Management Division of Beppu city hall, in order to impart knowledge about Tsunamis and evacuation when a Tsunami occurs.

Walking around town

In preparation for a Tsunami occurrence, groups walked from APU PLAZA OITA as a starting point to the Social Welfare Hall as a goal point, while looking for signs and spots that each group was directed to check, such as the areas above sea level / Tsunami refuge buildings / shelters. Since there were many participants, six different routes were prepared to avoid congestion, and they departed sequentially.

Since the lecture about Tsunami was given by a city staff member before walking around town, the participants seemed to be taking it more seriously personally while walking. However since there were six routes, it took quite some time to explain, thus actual time to walk was shortened resulting in some groups to not reaching the goal.

Task sheet (refer to p.18)

Since each group had a different route, taking pictures at each point was part of the task, and after confirming the pictures at the goal, the completion sticker was given. Same as the last time, a task to talk about the areas above sea level and tall buildings around the participants' homes, as well as shelters in their home town, was included in the task besides the tasks to be completed at each spot.



It was a rainy day, so having to hold umbrellas and maps, performing tasks, and conversing as a group was rather difficult.

Arrived at the Social Welfare Hall
Break time with tea and snacks

2) Workshop

14:00

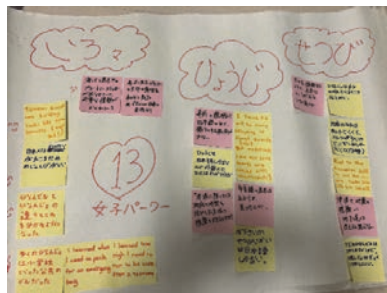
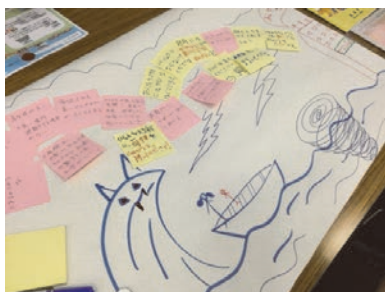
Sit as a group, and write down the recognition points on the poster



Present what the recognition points were by showing the poster to the next group

15:00

Announcement



On sticky-notes, everyone wrote down what they recognized one-by-one. After that, those recognition points were summarized by each group dividing them into categories by using different colors and drawings on vellum paper. The Japanese participants wrote on the pink sticky-notes and the foreigners used yellow ones. The differences and similarities were shared.

Recognition points of walking around town

Japanese	Foreigners
Tsunami refuge buildings were not easy to find	It is not easy to find the signs and shelters
The signs need to be made to stand out more	The signs would be more visible if it was red instead of blue
The signs need to be multi-lingual	The signs can not be understood if they are written only in Japanese
The roads in the Beppu residential area are very narrow	Roads are narrow
I never recognized that there are this many signs	There are many shelters
Since I do not walk normally, it is difficult to look for a place by looking at a map	Beppu locals were reliable when we did not know the route
Many hills and uneven spots in the town made me think that we need to come up with some solutions for the ones who are not able to evacuate by themselves	Not disabled friendly. Going up the hill is difficult
The interaction of Japanese and foreigners is necessary in general	Let's help each other with Japanese

Many recognition points were about "roads and signs," "how to indicate the sign in different languages," and "showing consideration to others." Also, as shown on the diagram above, there were many mutual recognition points between the Japanese participants and the foreigners. Some indicated their recognition of objects such as facilities, as well as the need for the human relationship of connecting with the Japanese and foreigners. Although there were 19 groups with 4-5 people in a group, all were observed to be nicely participating while performing the group work. As for the method of how to write about the recognition points, many of the Japanese participants wrote what they observed about the current situation, then what needs to be done. This may have been the result of many foreign participants were exchange students whereas most of the Japanese participants were already working secularly and were used to stating not only the situation, but also the solution.

Staff review

It takes quite some time to summarize the recognition points on the vellum paper, and it will be unsatisfactory if not able to complete it

⇒ Extra time is needed since performing presentations with other groups brings additional points.

Let's think!

Where are the shelter and the Tsunami refuge building in your area?

*Note: The Social Welfare Hall will be used as a temporary shelter in case of an emergency.

The answer of "Let's think!" on p.32: Indonesia

The third Get to know the shelter

Time and date: November 11th (Sunday), 2018 13p.m. – 15:30p.m.
Location: APU PLAZA OITA
Number of participants: 78 (Japanese: 37, Foreigner: 37, Staff: 15)
Detail of staff members (APU: 7, City hall: 5, General staff: 2,
B-biz LINK BIP: 1)

The goal of the activity

- To increase stock information (refer to p.30) regarding shelters
- To share information of the situation regarding shelters in different countries and learn the difference.
- To think about what we ourselves can do when disasters strike



The contents of the activity

- 1) Walking around town ... Measure how far a person can evacuate in 10 minutes, and experience the distance of a 10 minute walk
- 2) Workshop ... Discuss what we ourselves can do in the shelter, and possible situations when disasters strike

The flow of the activity

- 11:30 Staff meet up
12:30 Reception open
Grouping
Introducing one another
13:00 Opening address
13:05 Group discussion
13:10 Get to know the shelters
- 1) Walking around town**
13:20 Explanation given how to walk around town
13:30
Performing the task as a group
Break time with tea and snacks
14:30
Review
Sit as a group, and write down the "recognition points" on the program booklet



The goal of the activity was given at the introduction of this episode, having learned a lesson from the second time. Also, translation was added on the slides as needed in order for the foreign participants to be able to easily comprehend the direction and contents of the activity.

Get to know the shelter

At first, each group discussed what they know about shelters in Japan and other countries. Then, they listened to the explanation regarding the shelters in Japan given by a staff member of the Disaster Prevention and Crisis Management Division of Beppu city hall. In addition, they reviewed the knowledge of Tsunamis acquired from the second episode (regarding the expected height of a Tsunami, the time span of a Tsunami reaching the city, the necessary elevation level for refuge, and other points).

The Japanese words that are used regarding disaster prevention are technical terms, and are quite difficult for foreigners to understand. Thus this time, APU exchange students who are fluent both in Japanese and English joined to interpret the lecture of the city staff member given in Japanese, and other things.

Walk around town

Performed the tasks below as a group using the provided map (refer to p.18), and reviewed (refer to p.19) upon returning.

[Task on the way to]

Proposed that a Tsunami was approaching, headed to Noguchi contact interchange center*, and simulated how far a person can flee in 10 minutes.

[Task on the way back]

While heading back, we looked for the above sea level signs to see if the routes they took were safe.

Some commented saying "10 minutes allowed me to go less than I expected" and "I have problems with my legs, so it was a lot to walk."

*Note: The Noguchi contact interchange center which was established on the Noguchi elementary school site will be used as a shelter in case a disaster strikes. It is located about 10 minutes away from the APU PLAZA OITA.

2) Workshop

14:20

Commentary regarding shelters

14:30

What can we do in the shelter



Share it with everyone

15:00

Examination of the cases

Share it with everyone



15:20

Summary and announcement

Commentary regarding shelters

The commentary regarding how the city hall works when a disaster strikes was given by a staff member of the Disaster Prevention and Crisis Management Division of Beppu City hall. The information of how the shelters are set up, and how the city hall is involved was given, thus the participants learnt that the refugees need to be central in operating and organizing the shelter that they are staying at.

What can we do in the shelter

1. Each member considered what each one can do by observing the list of "role-sharing in the shelter" (refer to p.20) of the booklet.
2. Each one wrote what they can do on the sticky-notes and posted it on an A3 size vellum paper as a group.
3. Each member took turns to present what they can do and why they think that they can do that.
4. Some speeches about their personal experiences and episodes, as well as what they can do in the shelter in detail, were given.

Examples of what can I do at the evacuation center

Japanese	Foreigners
Able to use computers	Cooking foods
Changing into simplified Japanese	Able to drive large size vehicles
Interpreting Japanese and English	Entertain people for singing songs
Communicating with public officers	Translate native languages, English and Japanese
Arranging and preparing emergency foods	Talking care of children

Individual awareness and awareness of other people ⇒ Division of roles
The possibility of action when the disaster occurs can be like to thinking what we can do

Examination of the cases

A group discussion was held under the theme of "A foreign lady with a scarf on her head seems to be injured on her leg. She appears to be in much pain. What would you do?"

With the limited information provided, discussion of what should be done was held while inferring what the background of this "foreign lady" could be. Also, an exchange student who is Muslim explained about the rules of Islam, and was able to share it with everyone, thus by listening to someone with a different background in person, the importance of understanding each other was reassured.

Comments of the participants

- About the shelter; I was able to have the idea, I just need to do whatever I can, instead of being passive.
- Regarding Islam, I was able to understand that they are allowed to make a special decision such as to remove the scarf in the case of a life-or-death situation.

Staff reflection

- As for the discussion, it went quite smoothly since we divided subjects to four steps, addressing the designated discussion time, as well as providing facilitators.

Let's think! How many meters higher than sea level do we need to go up to flee from a Tsunami safely? (The answer is on p.38)

The fourth To experience

Time and date: May 12th (Sunday), 2019 13p.m. – 15:30p.m.

Location: APU PLAZA OITA

Number of participants: 72 (Japanese: 24, Foreigner: 36, Staff: 12)

Detail of staff members (APU: 6, City hall: 5, B-biz LINK BIP: 1)

The goal of the activity

- To cultivate an interest in disaster prevention through the experience of an earthquake in a simulation vehicle, and by making newspaper slippers
- To learn how to enjoy learning about disaster prevention by yourself through application

The contents of the activity

- 1) Walk around town & experience ... Walking around town in Beppu to visit shelters / Tsunami refuge buildings, and earthquake-resistant storage tanks
Experience activities to acquire the knowledge about disaster prevention
- 2) Workshop ... Answer a Yes / No quiz regarding disaster prevention
Discuss situations that are possible when a disaster strikes

The flow of the activity

11:30 Staff meet up
12:30 Reception open
Grouping
Introducing one another
13:00 Opening address

1) Walk around town & experience

13:05
Explanation given how to walk around town and how to experience

13:15

a. Walk around town

- Shelter (Elementary school)
- Tsunami refuge building (Department store)
- Earthquake-resistant storage tank

b. Experiences

- Earthquake simulation vehicle
- Newspaper slippers
- Earthquake swaying art



To avoid congestion, the groups were divided into two types, a.→b. and b.→a, to do the activities

From this time, “Yasashii Nihongo” was introduced to the Japanese participants in the introduction. To conscientiously have in mind that, speaking Japanese “with short sentences,” “using ‘desu’ and ‘masu,’” as well as “not using Chinese words” helps foreigners to understand easier, was explained.

Walk around town

Using a map, looked for shelters, Tsunami refuge buildings, and earthquake-resistant storage tanks, and took pictures there. Also, took pictures of the signs for areas above sea level, and carefully looked for dangerous routes in the case of evacuation, while walking around.



Since there were some foreign participants who were not able to understand Japanese, an English version of the task sheet for “walking around town” was prepared. Also, it was observed that some Japanese participants, who have joined in the past, were helping foreign participants and taking the lead.

To experience

- Earthquake simulation vehicle
The earthquake simulation vehicle of Beppu city was used to experience a 7 in intensity, on the Japanese scale, with 4 people in each group.



- Newspaper slippers
The way of making slippers with newspapers was taught so it could be utilized when there are no shoes available to protect the feet from debris right after an earthquake.

- Earthquake swaying art
Pieces of Origami paper were used to resemble buildings, to visualize how buildings would be affected at different heights.



Break time with tea and snacks

14:20

Review

Sit as a group, and write down the "recognition points" on the program booklet

Share it with everyone

2) Workshop

14:30

Disaster prevention Yes / No quiz



14:55

Examination of the cases
Share it with everyone

15:13

Summary and announcement

Review

Groups talked about what kind of places the shelters were, what they would do if the department store was closed, what the water storage tank is for, what kind of information was on the above sea level sign, and if there are any shelters and Tsunami refuge buildings around the participants' homes.

Disaster prevention Yes / No quiz

A Yes / No quiz regarding disaster prevention were given, and the groups answered by raising "Yes" / "No" cards. Some groups explained the reasons why they chose the answer as well. In addition, detailed explanations were given to each question by a staff member of the Disaster Prevention and Crisis Management Division of Beppu city hall.

The questions for the Yes / No quiz were taken from the "Disaster Preparedness Tokyo App." It was introduced to the participants after the quiz was done, as well as some useful applications and websites for disaster prevention such as the "Oita Disaster Prevention app."



Examination of the cases

The question "Because of a huge earthquake strike, you have to evacuate to a shelter (elementary school gymnasium). However you have a dog (3 years old female golden retriever). Would you take her to the shelter with you?" was given, and groups gave answers YES or NO, then discussed about it.

(Source: Disaster prevention card game "Crossroad" citizen version 5009)

All the groups discussed it while trying to imagine the possible various situations such as "A dog could have a therapeutic effect on the victims" and "Some people might be allergic to it." Also, this question was used to advertise the "Crossroad" workshop which would be held in July.

Comments of the participants

- The questions for examining the cases were very meaningful since it made me think deeply.
- I was able to interact with others by trying to speak English, and enjoyed the new experience of the quiz and the earthquake simulation vehicle.
- I've been in Japan for half a year, and I was able to learn something new, as well as recognize what I am lacking in my Japanese.

Staff review

- The grouping took longer time than we expected since many participants arrived right around the time to start the activity, resulting in a delay of the starting time.
 - ⇒ Plan a more flexible schedule with less activity, and add some time for adjustments.
 - ⇒ Request an early arrival on the flyer.
- Although we conducted 2 activities such as "walk around town" and "experience" simultaneously it was carried out smoothly. It was well organized with a slide showing a chart explaining the steps of the activities, as well as making a name tag with the group number they belong.

Let's think! If you feel an earthquake when cooking, you should turn off the stove as soon as possible. Yes or No? (The answer is on p.40) (Source: Disaster Preparedness Tokyo App)

The answer of "Let's think!" on p.36: In Beppu, 10 meters above sea level is considered safe, but the expected Tsunami height varies from region to region. Make sure to check the hazard maps issued by the local government and consider safe evacuation routes and evacuation sites.

Training session of “Yasashii Nihongo”

Time and date: February 9th (Saturday), 2019 9:30a.m.-12:30p.m.

Location: APU PLAZA OITA

Number of participants: 40 (Japanese: 32, Foreigner: 1, Staff: 7)

Detail of staff members (APU: 6, B-biz LINK BIP: 1)



◆What is “Yasashii Nihongo”

Have you ever heard of “Yasashii Nihongo?” It is simplified Japanese using easy vocabulary and expressions easy for foreigners to understand. For example, when an earthquake strikes, “The facility with cracked walls due to the effect of the earthquake” might be difficult for foreigners to understand, however it may be easily understood if it was “The building is broken because of the earthquake. This building is dangerous.” We can minimize the foreigners who will be left out without information during a disaster if we use “Yasashii Nihongo.”

◆Workshop

Through the three occasions of walking around town, the need of “Yasashii Nihongo” became clear. Thus we as Beppu shield decided to hold a training session of “Yasashii Nihongo” with Ms. Atsuko Sugimoto from the “Yasashii Nihongo” volunteer group on February 9th (Saturday), 2019. During the first half of the training session, we learnt that when disasters strike, foreigners will likely face hardships for various reasons such as, not having basic knowledge about disaster prevention, as well as the words for disaster prevention being hard to understand. Then, we considered what kind of things would be difficult for foreigners. In addition, we learnt the 12 rules of “Yasashii Nihongo” and what kind of situations we can utilize it in. In the latter half of the session, we practiced converting to “Yasashii Nihongo” as a group, and at last, listened to the strict, yet enjoyable comments and reflect of Ms. Sugimoto, the trainer. After that, she introduced some cases of how different local authorities are trying to utilize “Yasashii Nihongo” in their areas.

◆ Group activity

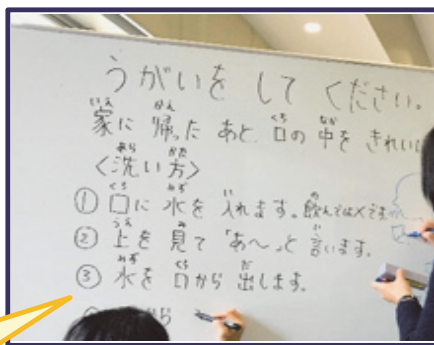
We practiced converting a text example (How to “gargle” and how to “wash your hands”) to “Yasashii Nihongo” utilizing the 12 rules that we learnt in the session and consulting with each other as a group.

The original text (gargle)

When you return home, or have an irritation in the gullet, you need to gargle with water or tepid water to discard the virus.

<How to gargle>

- (1) Put some water in your mouth, “swish” it, and rinse out.
- (2) Put some more water in your mouth, look up to “gargle” for 15 seconds, and spit it out.
- (3) Repeat “gargling.”



Utilized the 12 rules of “Yasashii Nihongo”

“Divide a sentence with spaces, and include spaces between words”

“Write a short and easy structural sentence” and other points

Determining what information is to be conveyed and highlighted is important as well!

This training session gave us not only the chance to learn about the 12 rules, but an opportunity for us to think what really “Yasashii (easy, kind)” means for foreigners. Beppu would be a more livable town if there are more people who show consideration to others and act kindly.

Disaster prevention card game “Crossroad”

Time and date: July 6th (Saturday), 2019 10a.m. – 17p.m.

Location: APU PLAZA OITA

Number of participants: Morning session: 51 (Japanese: 36, Foreigner: 8, Staff: 7)

Afternoon session: 26 (Japanese: 18, Foreigner: 1, Staff: 7)

Detail of staff members (APU: 6, B-biz LINK BIP: 1)



◆About the disaster prevention card game “Crossroad”

It is a disaster prevention, teaching material*, card game created in 2004 based on the interviews of the Kobe city staff members, who were the disaster responders of the Great Hanshin-Awaji Earthquake (1995). This teaching material's aim is “for all generations to view disaster prevention as if it is their own responsibly while enjoying learning about it in a game style, and also to encourage them to take action in disaster prevention through the conversations with others.” Although the rules are very simple, each one has to simply answer YES or NO to the question on the card, its unique feature is that all questions make everyone wonder if the answer should be YES or NO. It helps everyone to realize there are different viewpoints and values from their own, by not only answering YES or NO, but also explaining the reasons why they chose that answer.

<Example question> *All questions are about 100 words

You are in charge of food distribution in the shelter. It's been a few hours after the disaster. You've received reliable information that there are 3,000 evacuees in the shelter. Currently 2,000 meals are secured. How many more you can obtain is unknown in this moment. Would you distribute the 2,000 meals for now?

Yes (I will distribute) OR No (I will not distribute)

Source: Disaster prevention card game “Crossroad” Kobe version 1008

◆Workshop

Beppu shield held a workshop on July 6th (Saturday), 2019, with Mr. Osamu Nishi of the Kobe Crossroad society as a guest, with the hope that the Beppu citizens would become more disaster prevention minded from experiencing the game.

The workshop was organized in 3 sections.

<Crossroad experience (1)>

While listening to the explanation and experiences given by Nishi trainer, they tried 4 questions as a whole.

<Crossroad experience (2)>

Each group played the game with mutual questions. Controlling the progress of the game by oneself became a time that nicely ties into the Crossroad experience (3). After that, we analyzed the strong points and weak points of this game, and learnt the profoundness of this game.

<Crossroad experience (3)>

Questions were created with the subject not being limited to the theme of disaster prevention, yet were familiar to all, including dilemmas. It became a time to reflect some common issues from various directions through the group discussion and determining questions to create as well. Also for the ones who are trying to advance disaster prevention, it was very meaningful to be able to learn the know-how in creating the questions that are suitable to each local area.



A question created by a participant

You live in a house that you own. Half a year ago, a family who are known in the neighborhood as quite odd fellows moved next door. You have been extremely bothered by the noise they make until late in the night, and are very stressed. Would you go and talk to them about it?

Yes (I will go) OR No (I will not)

The answer of “Let’s think!” on p.38: It is dangerous to get close to the stove during an earthquake. Calmly turn off the stove after the earthquake has stopped.

5. About booklets

Contents of booklets



①Let's write the names of our group members!

This time is for a chance to get to know each group member by asking their name, country and hobby while the event starts.

②Let's write your group name and check group number!

Use this time to decide a group name or check the group number to avoid missing one of the members during the town walk.

③Contents of today's activities

Timetable with the event's content.

④Vocabulary list related to disasters

There is a vocabulary list which relates to disasters and this is useful for foreigners living in Japan.

This vocabulary list was requested by overseas students before participating in the event. The students from overseas asked to do this vocabulary sheet before they are participating the event.

⑤Task sheet for town walk

There are some tasks for the participants to achieve in preparation for a disaster.

These includes: finding signs or buildings.

There are some conversation topics to engage participants with until they get to their next destination..

⑥Reflection sheet for town walk

After coming back from the town walk, participants are invited to reflect on their experiences.

⑦Documents for workshops

These documents are used for workshops after town walking.

⑧Useful information (websites, app)

Some useful websites and apps are introduced at the end of the booklet.

※Please check the Japanese version p.17-p.21. There are some samples used in actual events. Sorry there is only a Japanese version, but it will help you to get some ideas about how the event runs.

※We created the English version task sheet only for the 4th disaster prevention town walking. The task sheet is on p. 42.

Task sheet

A. Evacuation shelter

In front of the evacuation shelter

☐ Can you describe the shelter?



☐ Let's do a funny pose and take a picture.

B. Tsunami evacuation building

In front of the tsunami evacuation building

☐ This is a ()-story building.

☐ Take pictures of these signboards.📷



While walking, please discuss about this topic...

・ What are the differences between tsunami evacuation building and evacuation shelter?

Sea level indication

In front of the sea level indication

☐ This area is ()m above sea level.



☐ Is there anything written on the sea level indication besides sea level.

☐ Take a picture of the sea level indication.

C. Water supply in case of earthquake

☐ Find the signboard of the storage tank.📷

In front of the signboard of the storage tank



☐ After the earthquake, what can people do here?

Find dangerous places ※Walk a different way from the one you took when you return.

☐ Mark dangerous places on the map on the previous page if you found them.

☐ Why are they dangerous? Talk about reasons with your group members.



Comments of participants



Beppu's disaster prevention event was fun, practical and well-organized. Working in teams, we walked to a designated safe place, prepared and ate an emergency meal, and considered necessary items for emergency kits. As a result, we are better prepared in Beppu!

Kimberly Sevigny (USA)

Since I had sad experience in 2015 Nepal earthquake, my biggest fear while coming Japan was disaster like Tsunami and earthquake. However, Bousai Machiaruki made me relieve. I would like to thank everyone in APU, B-biz LINK BIP and Beppu city.

SHERPA Pemba Lhamu (Nepal), APU students

I really understand how enough Japan prepares to natural disasters through this activity. It involves modern and efficient technologies and enough education, which really need my country to learn. Thanks for this chance, I know more about protect myself and I will use this knowledge to help more people.

ZHAO Xianghao (China), APU student

A disaster that strikes suddenly is scary. However lack of knowledge in responding to it is even scarier. I learnt about shelters, attaining accurate information, and connecting with people. I would like to use the knowledge that I attained through this experience in the case of an emergency. I checked the shelter in my area and the evacuation route right away!

Mariko Iizuka

The occasion to acquire knowledge of disaster prevention is a chance to learn the town, the people, and the importance of thinking about the earth, in which various people and contents mingle to begin with. It should be promoted as a new approach to the collaboration model for the government and private entities.

Rumiko Ikebe

It was brilliant and a fun idea to walk around town as a group while doing tasks. Actually seeing the signs for the Tsunami refuge buildings made me realize that there are the same signs in many other places as well. Also, it was valuable to be able to experience an intensity of six on the Japanese scale in the earthquake simulation vehicle.

Takako Kato

By joining the walk around town it made me realize many things, such as there are people who are from different countries with different backgrounds around me, and signs and shelters that I had never paid attention to. This experience inspired me to see the importance of getting to know my town and neighbors, as well as being disaster prevention minded.

Miho Takeda

Walking around town for disaster prevention that enables us to be educated along with the international students is warm, fun, and a meaningful activity in saving life. I really felt that this experience and the trust that was cultivated in each other through the time we spent together face-to-face will be useful in case of an emergency!

Ai Tateyama

Although I am not a person who is able to speak much in another language, I was able to join without pressure. Also the disaster prevention training session helped me to realize many things and it was very educational while interacting with the international students. I am looking forward to joining the next time as well, and I am so extremely grateful for your wonderful effort that I take my hat off to you.

Beppu city disaster prevention expert, Keiji Nakamura

Beppu was struck by an earthquake four years ago. And about 50 international students evacuated to the Sakaigawa gymnasium. With that experience in mind, I came to know the activity of walking around town and interacted with the international students, and my hope for them is to enhance their awareness and deepen their knowledge about disaster prevention through the discussions, as well as to consider the measures in advance. I am grateful to meet you all.

Beppu city disaster prevention expert, Fumio Nasu

By being mindful of "walking around town for disaster prevention," I was able to learn about the signs for disaster prevention and shelters, as well as the issues to be worked on. My thought was that we need to put effort into the displays that are understandable to all in this diverse society.

Koji Matsuura

What a wonderful activity, completely different from disaster prevention drills and training in the past, with different generations and countries together while experiencing different cultures. I would love to join again.

Yuji Miyazaki



Comments of staffs



Natural disaster could be far bigger than our expectations. We have no control of it. However, we have managed to overcome the disasters in the past due to an engaged human's power. With the same wisdom, we can build a society where people positively care about each other and no one is left behind.

Ishimura, APU Faculty 

It is my pleasure to be one of the staff members of this activity. I can see international students and Japanese locals walking and talking together. Their smiling faces give me the power to step forward. I thank everyone for the exciting moments that keep me going.

Itai, APU Faculty 

Every time I participate in the Bosai Machiaruki activities, I learn a lot about how we can get together to support each other in a multi-cultural environment. It would be great if your experience in these events can help you help others in the case of unexpected disasters.

Inoue, APU Faculty 

I am very glad to be one of the staff members of these meaningful events. It gives me motivation when seeing everybody enthusiastically learning from each other no matter the culture and the language difference. I also would like to hold the learning spirit and cooperative mind.

Takada, APU Faculty 

It has been seven years since I came to this city, but it was not until I made the connection with the district's members through Bosai Machiaruki that I could truly realize and say that Beppu was my town. To stand against the future disaster, let each of us hold our own shield and support one another.

Yoshimura, APU Faculty 

I am happy to hear that Bosai Machiaruki is supported by citizens in Beppu. I have contributed in the activity by suggesting the Beppu Shield logo design. The design conveys the idea that of a life with smiles and people's heart in it, with Beppu's Onsen. This is our protection shield.

Iwamoto, Former APU Faculty 

For these two years, it has been my pleasure to attend these events and I very much enjoyed planning, going out and talking to new people who I would not have met without these activities. Following the specialist's advice, I would like us to have three more consecutive years to continue these events.(at least)

Toyota, Former APU Faculty 

I participated in Bosai Machiaruki activity first as a student and later as a staff. It was a good experience to learn about preparation and evacuation in an emergency, since I had not had much knowledge about disaster preparation. I recommend everyone participating in it.

Isa from Bahrain, APU graduate 


Bosai Machiaruki's key feature is the open, borderless and warm activities which are also seen in Onsen culture in multi-cultural city of Beppu. It is one of the measures to lead the city to the realization of a society where everybody can be safe and happy.

Koh, B-biz LINK BIP 

One of the good preparations for disaster is to check the Beppu City Bosai Map. It will provide you with information about what you should do and where to avoid going. Sharing the knowledge introduced in Bosai Machiaruki with your friends is also useful to promote a safer environment.

Matsushima, Bosai-Kiki division, Beppu City 

Bosai Machiaruki is an event where people can get to know somebody they have not met before. It is a place where you can talk and meet interesting people. It is an opportunity for you to learn how to support each other in a multi-cultural town like Beppu.

Takagi, Bunka Kokusai division, Beppu City 

Bosai Machiaruki helped me to realize small but important information in the city, such as the sea level and shelter signs and shelter-ready-buildings. I hope Beppu will grow and become a city where everybody care about each other regardless of their nationalities.

Matsuoka, Bunka Kokusai division, Beppu City 

7. Conclusion

These are the summaries of our activity for the last two years.



We put effort into the foreigners and Japanese learning about disaster prevention together, and to connect with each other, in the past two years. The foreign residents are not guests, but a part of the local society. Although it's been said that the Japanese value hospitality, it is important to make a comfortable and livable town that cares for each other in the future multicultural society, rather than just being hospitable to foreign guests.

The post-earthquake research shows that the Japanese who already had regular interactions with foreigners had a good impression about the actions of foreigners, whereas the ones without regular interactions did not have a positive impression of them. As expected, getting to know each other is an important key factor to cohabitation.

We believe that “Walking around town for disaster prevention” not only gave the trigger for the international students to be interested in disaster prevention, but also gave them opportunity to get to know the town and people, as well as the chance for them to be connected with the local Japanese people. Also through this activity, various connections were made such as with the university, city hall, local association groups, and the residents. It must have helped many people to realize the things that they were not aware of while each of them took action as a part of the local society through discussions, putting their social positions and cultures aside.

We continue our activity with the hope of Beppu being a city where people actually see each other's faces and communicate freely.

Beppu shield



